（遞信省認可）

いらつめ

掲載要目

西山靜子作 漁夫（韻文）

懸賞文藝 嬉しいもの

第八十一号
一冊五錢
（別製八錢）

明治廿四年三月廿六日發兌

五七及び七五……美妙

脚氣病説

新出小説 愛の板ばさみ

身長を高く見せる法

トケイの語義

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

いらつめ第八十一號目次（明治廿四年三月廿六日）

無名小說（四）…………神田一女生

嬉しい物三つ（懸賞文藝）

日本音樂史稿（八）…………準縄子

漁夫（韻文）…………平山靜子

三浦醫學士の脚氣病說

愛の板ばさみ（一）…………東天紅

文學小言

硯友社風の批点＝文學部内の一喜一憂＝五七と七五（雲峯氏へ）

小說花ふりましけた（五、六）…………臙脂舍由緣女

我家（韵文）…………鹿又松苗

寄書

つれ〴〵（西鶴文の運命＝飛入言文一致家＝新字＝女子の名と仮名）…………まゝ子

伊賀國結婚奇風…………笹川はる

戀の歌につきて…………熱第史女

通信問答

和歌初學書＝撒水と皮膚＝身長を高く見せる法＝パノラマ＝制度沿革史＝女粧沿革史＝各文學家住所＝懸募文〆切日＝時計をトケイといふ譯＝モナカといふ菓子名稱＝雨月物語、浮世風呂、娘節用の價＝面疱の跡の紫色＝胡麻油は不消化である＝鷄牛兩肉消化程度＝口中れアレを治す＝タコやマメを治せ＝顏を打ッたの〻療法

●別製挿畫…………極彩色石版刷美人圖

いらつめ定價

並製
一部金五錢、府外郵稅別に五厘
六部金二拾七錢、府外郵稅別に三錢
拾二部金五拾四錢、府外郵稅別に六錢
二拾四部金一圓、府外郵稅別に拾二錢

別製
一部金八錢、府外郵稅別に五厘
六部金四拾七錢、府外郵稅別に三錢
二拾四部金一圓八拾八錢、府外郵稅別に拾二錢
（別製は最良の洋紙に印刷し且每号内外國景色、風俗、花卉、美術、動物、英傑、學者、美人等の寫眞を必らず少くも一葉以上添へ、讀者の娯樂に供します。）

●每月二回發兌（五日二十日）●府内無郵稅●金子御差し送りの手續きは小爲替ならば拂渡郵便局とある處に（神田郵便局）と記し受取人欄内に（神田平永町九番地成美社）と御記入の事●郵劵代用は五厘切手で一割增の事●見本は五厘切手で並製五錢五厘別製八錢五厘領收の上差し上げます●廣告料一行八錢割引無し

從第七十八號至第八十二號 五部版權所有

明治廿四年三月廿五日印刷 明治廿四年三月廿六日出版

發行人 東京市神田區平永町九番地居住 山田武太郎

印刷人 東京市本鄕區駒込西片町十番地居住 山本鑑之進

發行所 東京市神田區神田平永町九番地 成美社

○懸賞文藝新題

○第四十二回題（唱歌文章）
右 日章旗…………四月十日〆切

○第四十三回題（何でもよし）
右 花の色…………四月廿日〆切

○第四十四回題（唱歌文章）
右 風鈴を買ふ…………五月十日〆切

○第四十五回題（唱歌文章）
右 薄きぬ…………五月廿日〆切

○第四十六同題（何でもよし）
右 愛兒の夢…………六月十日〆切

○第四十七回題 何でもよし）
右 盲むすめ…………六月廿日〆切

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

いらつめ第八十一号（明治廿四年三月廿四日）

無名小説　神田一女生

第三回の續

客「なるほどさういへばさうねエ。どうも私も強情なのでしやう、人にとやかう云はれると却ッて意地になッてやり通す氣になるれ、だけども妙よなせだの貴孃のいふことに逆ふ氣よならないの。自分ながら奇体だと思ッて感心してることよ」。

主「おほゝゝそりや嬉しいことねエ。ちやこれから無理ばかり言ひましやうか、おほゝゝ。仙臺からお便りがありますの。兄さんからも？」

客「え丶時々手紙が來ます。兄は來年の夏かへりますッて。此間も學校の瀬田さんが洋行なすッて、私は羨しくッてたまりませんでしたよ」。

主「さうでしたッてねエ。新聞に出てゐましたよ。あの方は英語も佛語もお出來だからよう御座いますねエ。」

二人の咄しの如く靜子は昨年ぎり腦病の爲學校を退き、當時は繪畫と和學、裁縫と專ら修めゐるものとぞ。

今まで誰とも分からざりし客の少女こそ野澤花子と呼ばれて七つの時月山の隣家に引き移り、はからず學校で親しくなり、靜子とは幼なじみ、年も同年、知らぬものは姉妹とおもふ程れ親しみ、花子の父は野澤等といッて元老院議官なりしが、昨年宮城縣の知事を拜命して、夫人と共に末の幼子をつれて赴任、花子も田舍に行ッては學問が出來ぬ、東京に殘してとの頼みに、丁度等の弟花子のためには叔父になる某、當時内務省に出任して、相應のくらし、四十近い年まで子といふもの一人も無く、それに妻君も至ッて子煩惱で、今まで花子兄弟を我子のやうにして、二晩三晩もとまらせてゐたこと故、今皆が田舍に行ッては私等夫婦も淋しくなり、又當人の爲に學問も出來ぬこともゆゑ、花子と弟の明を此方に殘しておかるゝがねゝと先から頼むやうな言葉、それではとすべての監督を弟夫婦に托して、花子と十一になる明と東京に殘せしとぞ。元來花子には兄もありて、是は當時洋行中なり。花子れ咄の中の青山敏といふは等の姉の一人子にて、母は國に殘り、敏のみ修業の爲出京し、是亦叔父の家にゐるものとぞ聞きぬ、

第四回

鏡臺に向ッて髮をそろへてゐる靜子、髮結ひは癖直しも濟んでながき髮毛一握に握ッてすき上げながら、

髮「長く束髮にばかり遊ばして居らッしやるとお髮がだいなしになりますねエ。このおうしろの大變されておりますこと。今日はお結ひ遊ばしますか。れ島田に？　何處へかお出かけて御座いますか？」

靜「お晝から博覽會に行かうと思ッて居るの」。

髮「それも宜しう御座いますこと。大層な人ださうで御座

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

いませんねエ。　私なんぞも毎日々々仕合せなことでも御座いませんが家業に追はれて見物どころでは御座いません。」

静「さうだらうねエ。　然し忙しいのは結構だよ。」

髮「鳥度お前髮を御覽遊ばして……」

静「さうねエもう少し大きくしておくれ……それではいゝよ」。

髮「もう何度も御見物遊ばしたので御座いませんか。」

静「このあひだ本館だけ見て來たけど中々はなしするほど覺えてゐられないよ。」

髮「さぞお立派なことで御座いましやうねエ………野澤樣のお孃樣は始終お束髮でゐらッしやいますか。」

静「もうずッと束髮だよ。　それにとうに前髮をそれ切んなすッて。」

髮「おやまアあんなうつくしいお髮を惜しいことを遊ばしましたね。　それぢやもう日本のお髮には遊ばさないおつもりで御座いますかしら……お根掛けはどちらで御座いますか……こちらを……大分この節も又皆さんが日本のお髮に遊ばしますからいゝことだと喜んで居ります、おほゝゝ。」

とかうしてゐる内に品のいゝ高髷が出來上り、

髮「雨天はお差し遊ばさないので御座いますか。　あのいつものがどんなにお品がよいか知れませんよ。」

静「私にやあんまり派手ではあるまいかねエ？」

髮「あんなことを仰ッて……あれが派手だッたら仕方が御座いません。　あなたに失禮で御座いますもの高髷に遊ばすと一段御器量が……」

静「あんなことばッかり言ッて………それぢや又五日目に來ておくれ。」

髮「かしこまりました。」

とつかは歸ッて行くあと靜子は落ちてゐる櫛丁寧に拭いて頭に挿し、

静「さゝ此處を片付けておいとくれ……もう十二時だらうねエ……おやもう打ッたれかい？　ちッとも知らなかッた。」

起て母の部屋に行けば春雄を抱いて乳を飲ませてゐる處、秀吉も傍で何かしきりと紙を切ッて余念の無い樣子、

母「もう出來たのかい。　大層今日のはよく出來たよ。　どうしてもあの髮結ひは島田が巧手だねエ。」

静「さうのやうで御座いますねエ。　お母さんはどう遊ばしません？」

母「博覽會かい。　私はよさう、どうも春雄が少し熱があるやうだから……おまへ行ッたら瓦煎餅少しばかり買ッて來ておくれ。」

秀「姉さん博覽會に行くの？　僕も一所に行かう。」

静「おやお前今日も明さんが遊びにお出なさるッて先きさう言ッたぢやあないか。」

秀「あゝさうだッた、すッかり忘れてゐた、いけないな……」

おや姉さんこのつぎ一所に行くよ。」

博覽會開設にありてから上野廣小路の賑かさ、とりわけ今日も日曜とてつくりおつくッて練を出す姫御前もあれば、見えも無ければなりふりかまはず、束髮も今朝結んだものとは見えぬ、見えか近眼か眼鏡とかけ、沓ふみあらして出かくる女生徒あり。　袖腕に至り、衣は脚に達し、ステッキふりまはす壯士風の書生、都人に打まぢり、簑笠で得々然たる質朴な土くさい百性、官人もあれば藝者もあり。　鳥度こゝに來れば日本の風俗上下共に見られる譯、士農工商打まぢッてれ混雜中と行くのは鐵道馬車に人力車引きも切らぬ賑やかさ。今しも行く車とかへる車松坂屋の角で……あゝとおもふ間にのちッとんふ音、「べらぼう先、まぬけ！」「なんだ目を開いて歩るけ！」と車夫のかけ合、二三度車輪が廻るとおもふと一方の車が仰れけるわ……「やア車がひッくり返ッた」といふ聲に一方に乘ッてゐた娘、

娘「ちよんと新七お待よ。　今の車が引ッくり返ッたやうたよ……まアお待ちッたらお待よ、鳥度あとあおもどり！」

とんふ主人の言ひ付け、車夫は澁々ながら後へ戻ると、客れ老女は今やうく扶けられて、起き上ッた處、見ると五十あまりの品のいゝ老婆、娘も車から飛んで下り、衣服の塵と拂ッてやりながら、

娘「まアお危險あい、何處ぞお怪我は？　あまりまことますのでつひ誠に濟みません………」

老「いゝえお詑には及びません。　お互ひ樣にわるいので。」

といひながら左の手を揉んでゐるのも余程痛む樣子、

娘「あなた大層お手がお痛みのやうで……只今で御座いますか、まア何う致しましやう。」

と娘はとつおいつ。　何しろお詑ながらお送り申さねぞ……いゝえそれでも私の心が濟みませんから………」

いさはりあがら老女を車に扶け乘せ、われも車に乘りうつれば、先の程より二こと三こと爭ッてゐる車夫も主人の取扱ひの案外なるになッけにとられ、そのまゝ車を曳き出したり。何りといふと寄ッて見たい人心、この談判の僅かの間に集ッた彌次馬連、巡査れ制するのも耳には入らぞ、後の方では御苦勞樣、足爪定てゝ延び上り、兩側の家々では急いで二階に駈け上るなぞ、見て益にでもあることか、笑止千萬、見られる人こそいゝ迷惑。　これ數十人の親線が一点お集まるも只この娘一人とはさてもく。　やがて車と曳き去ッた跡も言ひ度いまゝの評とりく、何處へ行てのちりくでらく。

甲「えゝ、おい！　今のはすてきな代物ぢや無いか。」

乙「さうよのう廣い東京にも二人とありやしめえ。」

丙「あはゝゝそりやあんまり褒め過ぎるせ。　あの樣子ぢや送ッて行ッて、何がしか療治代を出すだらう。」

甲「あれ婆さんも糸織りの小袖に黑七子の羽織、切り髮で、

くろがもの車夫は樣子ぢや然るべき處の隱居だらうなか〱品がいゝからなア。」

乙「さうすりや療治代なんぞ出しちやまづいな。　藤村か風月の立派な菓子折と見舞ひにやるか。」

丙「自分の事ぢや有るめエし、何でもいゝや……早く歸らねエと又親方の大目玉だぜ。」

一方も年寄が集ッての今の噂、

「ほんたうに優しい美しいお孃さんで……私もどうか彼な嫁が欲しいもので……」

「さうで御座いますよ。　お互ひに年を取ると優しくして貰ふのが何よりで……うちの娘なんぞ何だかつん〱してちッとも可愛げがありませんがあゝいふお子さんをお持ちの方はさぞお樂しみのことで御座いましやう。　あゝア年を取ると愚痴ばかり出まして……」

こッちは又聲高く呼ぶ書生、

書「おーい高林君待玉へ。　いくら急いだッて車に追ひつくものか……おゝい高林君だめだよ、断念め玉へ！」

呼ばれて足を止めた書生、

高「何だ、馬鹿に大きな聲で呼び止めてミッとも無いぢやないか少し考へ玉へな！」

書「だッて君が無宙で僕を置いてかけ出すからさ……そオらもう何處へ行ッたか分からないぢやないか……あはゝゝ、残念さうな顔して、見られた御面相ぢやないよ。　断念め玉へ……しかし頗る尤物だッたなア。　君の樣な多情な動物は無宙になるのも無理は無いさ……何時だらうもう博覽會も遲かアないか、僕は時計を持ッて來ないから君のを見せてくれ玉へ。」

高林といふ男はうなづいて懷へ手を入れ、不審は顔色、又もあちまちと探りながら洩したれば「あゝしまッた！」の一聲、一人の男は大概それと察して、「やられたのか？」と言ひは言ッたが高林の顔に笑しくッてたまらず、思はず吹き出して、「あんまり先刻見とれて居るからその間にだらう……そんなに茫然して居たッて仕方がない、さア行くべし」しばしの間の可笑しき出來事なりけり。

まださはさはしくもあらぬ時候なるに、はや出した氷店、他に客も無ければ只一人隅の方に床几に腰を掛けて、手帳に何か認めてゐる若い男、折から入ッて來た一人の紳士、無宙でゐる先の男は肩を鳥度叩れて、

紳「おい君何を書いてゐるんだ？」

男「おゝ木村君かちッとも知らんで甚失敬……今がた廣小路で評判の月山孃ね、あれについて少し事が有ッたのだが……實に美なるものだね僕が豫て書いてゐるあれね……そらあれさ、あの中は美人に苦んで、空想をひとつ書て居た處だッたが今日ふ斗月山の孃を見たら打ッてつけた其作りから何から何まで忘れん内と思ッて書きつけてゐる處だ。」

第三十八回懸賞文藝應募得點

題　嬉しいもの三つ

●俳句

（イ）　竹内儀三郎（カミツケ）

孝道の届いて嬉し雪の筍

無事でゐる子の便りあり秋の暮

待ち詫びし産の便りや老夫婦

（ロ）　中山とな子（カミツケ）

待ち兼ねて生れた孫や男の子

養父入や子の顔のぞく親おろろ

羽ぞめして親のあと追ふ巣鳥かな

以上二組第四等賞

（ハ）　近藤山石（カミツケ）

雛抱いて笑顔つくるや娘の子

藪入りに行く夜やせうも寝られず

はつちぎりして忘られず柿の味

右第三等賞

●唱歌

（イ）

學びの窓の友垣と　互みに睦み親みて、
雛様ことよ翔うたに　袂つらねて野邊あそび、
世のうきことはしらず弓、　春ようかれて戯れし
幼なきころの樂しさは　嬉しきことの一つなり。
戀てふものゝ所爲とは　知らぬころより馴染めて、
床しとおもふその君と　妹爺の縁結びなし、
比翼連理と契りけゝ、　愛し可愛の稚兒を
擧けたるときの樂しさは　嬉しきあとの二つあり。
頭に霜といゝきて、　腰に梓の弓と張り、
石をもとほす健やうさ。　家も豊に富み榮え、
親子親しく團欒して、　語り暮らせるそが中よ
初孫擧けし樂しさは　嬉しきことの三つなり。

右第四等賞

●文章

（イ）　蘆野潤二郎（イヘシロ）

父上母上の帝都見て來んとて旅立たせ給ひしあとよ好き日和の幾日ともなく打續きたる。人目も草も枯れ果てし山里に久しく病みける折親しき友のはしなく音づれたる。秋の夕てかなしきことなどおもひ出でつゝ獨立てる時故鄕の戀人よりおなし心をいひれてこしたる。いとうれしうありしよ。

右無賞

（ロ）　櫻式部（イガ）

頃と二月の始めありき、自分の越中立山へ差し掛りしは。かき曇る空、荒れ狂ふ木枯、折々と雪さへ顔をなぐる許りに降りしきるを、始めの程は小唄など唱ッてまぎらせしものゝ、

流石の足の爪先次第々々に冷えを覺えて、果は膓へ染み込む寒さ。　殊に木立多き深山の事とて追々暮れ行く山の景色なる此時は心細さも……先きに驛の頼みなく近き邊りに人家はなるべしとも思はさねば、日の常より早く暮るゝ思ひしてさて常よりも足の遅く運ばるゝ心地ぞせらる。　叱！　木玉に響く彼の聲、世有る猿三聲の涙もそゞろ胸にわきて、なる獨り旅はふつ／＼嫌なり。　木の下やう／＼暗くなりて、荒れしきる雪に笠重うなれば、目に見る如く疲れは増しぬ。　何事ぞ此時四面全く黒うなりて、辿る山路思へばまだ雪は有りしぞ幸いなる。　されど何處へ辿り行き、何處を今宵の宿と定むるやと思へば空にまけて行く流石に目はまたかき曇らぬ折も折―急げばまはるとは此事か？　ちえッ―　いかにません意地悪くも雪踏の紐も切れたり。心はまそ／＼いら立ちぬ。吾は打たれし如く疲れぬ。　恨めしさうに見上げし眼先き、打ち茂る木の間を洩れて、一点の火！　思ひも寄らぬことに茫然として、吾は石像の如く立ちて眺めぬ。　折しも火は光り幽かに動きて……なッ動く……火！　ではな！　あゝ此時の嬉しさ―　もしなくも眼の雲をちらしぬ。

やうやくにして辿り行けば果して一つの笹葺の屋根したる小家にて有りき。　吾も火の漏るゝ戸際に立ちて、此の始末と言ひ、一夜は宿りを乞へば、一人の男出でゝ、親切にも内へ招しくきぬ。　入ッて見れば、爐のほとり二三人の小兒を

取りまいて、母親らしきが孝子は昔話し。　なる山家にも家庭の教育……一家和樂は睦しさよ、それを聞く吾の嬉しさ！思はせ感慨に沈んで、沓を脱ぐをも忘れたりき。　やがて勸めらるゝ微温湯に氣付けられ、やうやくに足洗ひて、疊の上にあがり、初對面の挨拶丁寧にして、團爐のほとりへ坐を占めぬ。　彼の婦人も吾れ來りしを見て、先より廣からぬ勝手に何やらん働き居りぬ。　程も有らせず前に出でしとくそふりし高膳なり。　空腹なれば何もかまはせ、玉味噌の汁に盛り付けし麥飯うましとて、何杯食ひしや知れせ、いかなる珍味佳肴も之に勝るまとやある。　此に至ッて、吾も勇ましく高聲に叫ばん。　忘るまじ！　忘るまじ！　一生忘るまじ！此時の嬉しさを！と。

（八）

「はいわれ年齢でもその？」　　水野秀

「さやう！　どうかお聞かせ下さい。」

「あなたお門ちがひでもありませんか？　おほゝゝ老婆の年齢をお聞きなそッても無益ですからッ……」

「それはお互ひですから御戯談おッしやらずに……」

「でも申しましやう。　妾は明治三年三月三日―三つ吉の里で出生いたしましゝ。」

「それでも眞釜吹くてふ吉備の中山の南麓に於て桃の夭々たる重三の佳節を以て御出現遊ばしたとは如何にも吉相で々

ねェ。」

「形容は景物か知りませんが浮山お邸へ下さッて……」

「恐れ入りましたが……今日は幸ひ休暇ですから嬉しいと思ッたことを咄して見ましやうか、おほゝゝゝ。妾も實に初めての娘—母が一身の情を傾けし可愛子で、三才までも蝶よ花よで愛育られ—川といふ字を作ッたのも—十分の發育を斷られしも—曳き延ばしたく思はれしも、妾でした。さて運は奇なものです、枝葉昌えて今は三人姉妹、實に嬉しきことです。琴三味線胡弓を習ひしも、天地人が不揃とかいはれし生花も、眞草行の禮式も、痩馬に荷過ぎる程重ね〱してしうも三家の流を酌みし茶の湯も、三体の筆法も、書法も、呑み込みし時は愉快でしよう。いやまだありますよ、年端の行かぬうちも三大節などは格別樂しみるものですが妾はなの……去年の一月三日でしたよ本朝三筆と稱へられし空海のものせし一軸は家の重寶ですが、それと渡されて十六代は……」

「あ、あなたその十六代の令閨拜命式はどうでしたか?」

「おほゝゝいやですよ!」

「れもくしく三盃の杯をおあげなさッた時こそ……また一月早々からは親子三人といふスヰートホームを御組遊ばしたから定めてればゝゝ」

「はゝゝ塞翁は駒で將來が……あなたどうぞお聞かせ下さい。」

「大同小異でもから忘れの所と拾ッて補ひましやう……自由の民と生きて、衣食住に不足あきこそ嬉しき限りですが殊に恐れ多くも　明治天皇陛下は三條は欽憲を下して、要旨を示しゝまひしより漸く歩を文明み運び、二十三年議會を開いて、三千余万の同胞は歡乎いたしましたのは三種の神器に光を增して、嬉しく思ひましたよ。」

「まかし老母などは三部經を聽聞して咽びました感涙に。」

「はア老後もあは說教—看經—法談でも三つ!」

以上二章第四等賞

（二）　　阿房女史（トウケイ）

妾インフルエンザに罹れり。只或人の紹介によりて、此家の世話になりゐる計り、見も知らぬ他人の中、殊に此家のお千代孃とて初めより何となく意氣地（ヌキ）合はぬ、力を頼む人もなく、心細さを胸みたゝみて、床の中なる悲しさ。親の下にならば—とは絶えぬ思ひ。偶然目を覺して、室の中を見回せば、燈火影暗く、附添ふ人なし。

「お前もう換ッてお休みよ。え、又れ前まで煩ッてはいけないから。そして熱も少しはさめたかえ?」

「はい大分さめましたが何分一時は……」

「強かったかえ? それはまア可愛さうに。たつや、おまへ行ッて、お春さんの介抱をし—　睡くならば又代らせ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

るから」

「いゝえお母さん私がしますよ。お春さんは能くおなんなさるまでも私し一手で介抱しますよ。いゝえ外の人ぢやいけませんよ。」

止むるはお千代孃の母、從はぬはお千代孃。間を隔てゝ嬉し涙にむせぶは妾。

この後學校にて交り深きとて名高きはお千代孃と妾の中なりき。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

三年四年は夢の又夢、楓葉染み、鶯鳴くも幾たび、早や學校も卒業し、一度父母を訪はんとて暇を告げて、立ち去れる情ある人の常とて、お千代孃も兄上と共に停車場まで送り來れり。

「隨分御道中とお大切に。そして今度も是非お母さんかお父さんと御同道に御上京なさい。私も力にして待ッてゐますから。」

これ日頃口數きかぬ千代孃の兄上の妾に向ッての詞なりき。妾に取ッては此詞何となく嬉しかりし。日誌に記し置き、後々までも忘れ得ざりき。其何故かは自らも知らず。人々よ、妾將來の夫は此嬉しき詞を妾に告げし人なりき。

汽車は走り、車も飛ぶ。古しへに變らぬ吾門の見越しの松を見るも懷しく、赤子ありし弟の事、挨拶の仕方など考へつゝ

それまゝ庭に這入り、直樣座敷に通らんとも思ひしが、吾家ながら何となく憚る心地して、まづそれとなしに尋ね問へぞ、其聲の覺えあるにや、母上自ら出で玉ひ、

「おや待ッてゐよ。よくまア早く歸られたね。晋や！お前が待ッてた姉さんがお歸りだよ。」

と呼び玉へば、姉さんお歸りまッ？と云ひながらひよこ〳〵駈け來る弟、わが想像しつるよりも可愛らしく、これが姉さんとわが身を指し、母の笑ひながらうなづきたまふを見て、駈け寄ッて吾身に抱きつきたる時は嬉しさ！　可愛さ！　接吻物足らず、寫すに鏡なし。

（ホ）　　ひさご（トウケイ）

音なへば馳せ出づる少女、不思儀さうに我顏眺めたり、四年ぶりの對面、見知らぬも斷り。やう〳〵に思ひ出してや莞爾と笑まて、我方に寄らんとせしが、又思ひかへしけん奥に駈け入ッて婆や〳〵と呼び立てり。

抱かんと言へど流石人恥しく抱かれず、近寄れといゐも火鉢の向ふに坐るのみ。世に無常の風なくば、主人は彼の座に奥樣は此座に在して、くさ〳〵の話しも面白からんよ、今は東京の咄し誰にか聞かせん。小兒相手のおとぎばなし、何の四年間の游學——こんな咄しせうためあらん。

まだ十二にも足らぬ孤兒、内にもたッた乳婆と二人、爐邊人影も無うして、肥え太りたる猫のいぎたなく打臥したり。

佛壇にお位牌の數多きほど、頼み少なれは少女が身なり。
靈前に燈火は皎々と輝けども、執着の冥路を如何。　香爐一
朶の煙にも誰かし淚に咽ばざらん。　まして些やかなる手を
合はせて、何の頑是もなき少女の聘乎たる眼を濕ませたる時
あゝ泣かぬものは人にてあらじ、丈夫ならば堪えじ。
乳婆の話には此家には外に近き身寄りの人もなく、誰あり
て世話して呉れん人もなしと。　實に行き屆いたる不幸の儕
氣の毒と哀とに打沈みたる我心、今し蹶然勃興せり。
四五日われ心地惡しく、やがて行きつるに、少女も例なら
で打臥し、食も藥も進まずとなん。　うるはしかりし髮の艶
も失せて、可愛氣に見えし二重瞼も落ち凹み、かの頰の色さ
へ病魔が嘗め去りしか、紅の唇も土の灰か。　いぢらしやい
ぢらしや。　不養生しては一大事と手短かに言ひ聞かせ、藥
酌んで差付くれば、むッくと直に起き直り、ぐッと一息飲み
干したり。　乳婆が驚喜して更にも言はず、わが心亦如何計ぞ。

（へ）

奥野やす（じサカ）

砂を焦く夏の日にも、北風が肌に罌粟粒を播く冬の空に
も、倦まず、怠らず幾年か積んだ辛苦艱難の結果が今日の卒
業証書授與の式場に現はれて、其末班を汚すことの幸福を受
けるやうになッたのは渡邊迪とて才子の名望をさへ負ふてゐ
る壯年でせ（した）。　今此の
あゝどんなに（ヌキ）嬉しいでしやう（さか）。

文科大學を卒業して、學士の名稱を懷にしゝ渡邊氏の心中—
まして甲種の証書だッた（ヌキ）。　送別の宴會から戻ッて
獨り洋燈の火影で—常より明るう（く）搔き立てゝ—故郷へ
の手紙を認め終ッて、只管錦を飾る準備取を急ぎました。

＊　＊　＊　＊　＊

「た……た……大變ですよ。　お……お母さん！　お兄さんが。」
新聞紙を片手に遽しく駈け付けたのは迪の妹、
「なんだよ大變とは？」
「ち……沈沒したんですよ。　よ……橫須賀丸が。」
「えッ」
一言云ッたきり言葉の出ぬも道理、一昨日迪から明日橫須
賀丸で歸ると言ひよせて來たのですもの（した）。　唯（ヌ
キ）二人は余りの事に顏を見合はす（せる）ばかり。　眼も
何時か村雲に蔽されて、恨めしげ（さう）に見詰めた新聞紙
に時ならぬ時雨の雨（ヌキ）が濺ぎました。　頼みにならぬ
と知りつゝ萬一の—橫須賀丸　若しや橫濱丸の誤りでは—僥
倖を祈りながらも流石安堵しかねて、兎や角思ひ煩ふては夜
も碌に眠られず、一入長う（く）思はれて明るのを待ちかね
てゐましたが、漸う東雲を告げ顏な軒端の雀に眠つたでも無
い夢を破られて、起き出て見れば、何時の間に入れたか今日
の新聞。　無殘！　橫須賀丸沈沒の後報と題した一項、いよ
〳〵それと決つて見れば、讀まぬ先から胸が迫つて、又も二

人は思ひに沈んで、身は沖の石、涙は袖の乾る間もありませんでした。　が、不思議！　夢か？　現か？　此愁歎の最中へ突然立ち歸つた迪、

「お母さん只今戻りました。」

これを見た二人、餘りの事に氣を（も）取上せたか、只茫然と迪を見詰めて、何の言葉もありません（無い体）。　迪も不思議に思ひました。　久々で立歸りたのに碌々言葉もうけてくれず、そして二人とも愁ひ沈んでゐる樣子でそから（ヌキ）。　あれまで何か仔細があらうと思ふて再び、

「お母さん、私です。　迪です。」

言ふ聲は紛ふ方ない迪、全く幽靈でもなささう。　で二人もあれには何か譯があらうとやう／＼思ひ定めてさて何より先き聞きたい沈沒れ一條。

「迪！　お前はどうして戻つたんだえ？　汽船が沈沒したといふよ……」

「なるほどそれで解せました。　先刻からの御樣子も全くそれ故と承知致しましたが、それもこんな譯でも。　一昨日横須賀丸で歸る積まで、横須賀まで出ましたのですが、生憎時刻が後れまして、詮方なく昨晩の夜行列車で……今になつては却つてそれが幸でした。」

此話を聞いた母と妹、さてはさうであつたかと、今までの愁は頓に消え失せて、宛から時雨の晴れて、青空を見る樣に

心も長閑になつて、積る物語まは時刻の移るもは心付きませんでした。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

小成に安んぜるのは普通の人情、が之に反對なので渡邊迪です（した）。　文科大學を卒業して、學士の名稱を肩にしたが、まだそれで充分とも思はず、此上洋行をしたいといふのが兼ての宿志ではあるものゝ、儘ならぬは學資、今まではそうかうか内から貢いで貰ふことは出來たが、此上は迚も……是非志を遂げるには自分に學資を勘弁せねばと思ふもれから（ヌキ）此處で小說でも著はして、其内に金を貯蓄しやうと決心して、先づ手始めに「葦毛の駒」といふ小說（れ）と書いて、世に公にしました。　得意の才筆を揮ふて書いたことゝて、果してそれが世に持囃されて、一時此小說を讀まぬものは文學上の話しが出來ぬと排斥せらるゝほどの勢でした一日地方長官から一寸來て呉れとの手紙が來たので、迪は直ぐ行つて、何用かと尋ねて見ると知事―文學嗜好は―は唐突にも彼の「葦毛は駒」のことを話し出して、非常の傑作だと只管感歎の旨を述べて來て、

「此上洋行でもした來れば、一層君の身に光澤を添へるだらうと思ふがの。」

心ありげの言葉に迪は、

「私も其志を持つて居ないでも……」

流石後言ひかねて、口を箝んだ様子を見て取つて知事。
「失敬ながら學資ぐらゐのことは僕がどうともしやうから
…………」
言はれた時の延の心中はどうでしたらう？　幾度か頼を聞
えて勇み立ちて歸へる有様が頼母しいでも（ヌキ）。

以上三章第三等賞

（ト）　敬々女史（トロケイ）

七つ斗りの男の子が嬉しさうにばた／＼母の針仕事とし
て居る前へちよいと坐つて、さも熱心さうに、
「お母アさん！　あのウ………」
眞面目な顔を見て、可笑しさをこらへ、針を止めて、
「何え？　どうしたの？」
「何なの！　僕ね、明日は試驗に優等するの！　あのお隣
りの勤さんがね、優等をるとえらい學者になれるんだつてか
らねヱ。　んでさうすると繪紙をやらうつて僕よ。　だから
僕は二つ嬉しいことがあるの！」
笑ひながら母は、
「さう？　いゝねヱ。　おやア優等が出來たらお母さんも
……何がよからう？　さうさねヱカバンー革のカバンを買つ
てやらうね。」
「うれしいね、三つだ‥優等しやうや。」

◎◎◎◎◎◎◎◎

翌日の三時頃、小さな學者は門の外からにこ／＼して、い
きなり母は居間へ駈け込んで、
「お母さん！　カバンを……！」
、、、、、、、、、、
「あらまアお前靴のまゝでさ。」

右第二等賞

日本音樂史稿（八）　準縄子

浄瑠璃

浄瑠璃は其始め未ぶ詳ならず世傳て信長公の待女小野於通
と云へる者が作たる十二段の物語に始れりと云へりけれ共之
より前に既に浄瑠璃あるもの有りしよし其は還魂紙料に柴屋
軒宗長日記を引て辨したり且つ其の作れる十二段は藥師十二
神によりて成せしと雖左に非ず平家物語十二卷に倣ひて作り
しあるべし
嬉遊笑覽に今の薩摩三郎兵衛四代先の外記とはいひしもは琵琶法
師瀧埜檢校より是を習ひて西の宮傀儡とかたらひて人形に能
をさせて一日に五番づゝしける江戸惣鹿子など有りて未だ其の起
原詳ならず其十二段は目錄は

浄瑠璃御前申し子の段　花揃の段　美人揃の段
そとの諫言の段　笛の段　さかひの段
忍の段　浄瑠璃枕問答　ますと言葉の段
御坐遷りの段　吹上の段　御曹子東下り

等なり又た小野於通が作と云へる此十二段は序文近頃見れ
たる共其出所詳あらされば略せり又た操年代記には浄瑠璃は
井上大和椽（後ち播磨椽と改む）より起ると雖如何にや

江戸浄瑠璃の起始

江戸にて始めて浄瑠璃を語りしは薩摩浄雲なり（文祿四年ね
生る泉州堺の産なり始め虎屋次郎左衛門或は小平太と云ふ後ち薩
摩太夫と改め薙髪して浄雲と號す）其始角澤檢校より曲節を
習ひ得て江戸に下り多く新作を綴り一派の曲節を語り出す其
の門人丹後太夫丹波太夫源太夫長門太夫等何れも其聞え高し

（聲曲雜纂）此れ淨瑠璃太夫の元祖にして天正十六年頃より發流せるよし（音曲道智論）

淨瑠璃の諸派

義太夫節

義太夫節ハ竹本義太夫より起る元と攝州東成郡天王寺村の五郎兵衛といへる農夫なりしが生質淨瑠璃を好み然も聲柄大音清潔よして甲乙地合自然と兼備せし大丈夫の生質あり井上播磨掾藤原要榮氏存命の間淨瑠璃を能學び次に清水理兵衛（今播磨と稱す）に彼流の奧秘と習ひ傳へ且又た其頃京都に名譽を顯ハされし達人宇治加賀掾に立入て音節の秘術と受て執行し古風と仰て心の師範とあし肺肝を碎き鍛煉を盡し終に一流を語り出し名と改めて竹本義太夫と號し貞享二年道頓堀に芝居を興行し（竹豐故事）元錄十四年五月勅許受領して竹本筑後掾藤原博敎と改名す（音曲道智論）正德四年九月十日六十四才にして病の爲に終る（聲曲類纂今昔）（操年代記）死後に到て世擧て義太夫節を賞美し諸國に於て此流を學ぶ（竹豐故事）

豐竹節

豐竹節ハ義太夫より出ず元祖若太夫ハ大坂南船場の出產にして若年の時より井上竹本の諸流を學び家業を打捨て淨瑠璃に心を籠め工夫を疑らし終に達人の名を世に顯ハされ又世に冠たる器量にや音聲天然と格別に生れ質れし上乘人よ秀たる器量備ハりふり（音曲道智論）十八歲にて竹本采女と云へり道具屋吉左衛門永島重太夫など其頃の門弟なり元錄十七年長門九郎兵衛舞の芝居よ相座元よて豐竹若太夫と改名す（嬉遊笑覽竹豐故事）享保三年正月勅許して上野掾藤原重勝とあり又た享保十六年冬再び越前掾藤原重泰となる（音曲道智論）延享三年六十一歲にて雪の段を一世一代に語り納め隱居を或ハ云ふ寶曆六年の頃八十よ近くして隱居すと（嬉遊笑覽）

河東節

河東節ハ開祖一寸見河東ハ品川町の魚屋藤左衛門（嬉遊笑覽これハ市十郎と云ひ備前侯平大炊頭殿出入の魚屋ありと云ふ）が男よして藤十郎（嬉遊笑覽よハ東十郎に作る）といひ河東と號す（本姓ハ伊藤氏なるよし母方の姓を河邊と云ふ此家よ仝居して居たりしかハ河邊の河と藤十郎の藤を東よ變へて河東と云ふと聲曲類纂よ見えたり）志世利が係ハらず酒を嗜み遊嬉し遂よ產を破りて江戶半太夫が門に入り淨瑠璃節を學び和らげ手品市左工門と廣瀨式部太夫が節を交へて一家の風を成し出藍の譽れ高し享保十年七月廿日四十二歲ふして病死す（築地本願寺中成勝寺に葬る）門人河丈二代目河東とある（聲曲類纂）其流今よ絕えず

一中節

一中節ハ都太夫一中より起る此の人ハ京都本願寺派某寺よ住す弱年の頃より淨瑠璃を好み終に歸洛し山本土佐掾が門に入て鍛練し自ら工夫して土佐掾松本治太夫等の流義を和し一家を語り出す（聲曲類纂に潭海を引て文彌節變して一中節と云ふよ成たり（中略）一中系圖を見れハ都越後掾が次に記して越後掾が弟子とも見えたり都と名乘るも故ある可し云々と云へり）始め須賀千扑と號し后改めて都太夫一中と云ひ元錄寶永の頃一中節と名々世に賞せらる江戶節根元集に都一中元錄の頃追々はやれりと云へるハ京都よてのとなり又た春臺獨語よ寶永の頃京より一中と申す者來りて淨瑠璃と弘む云々此の一中ハ淨瑠璃の外に揚弓ハ名手よて一表よ百殘らず的中したりと左れハ一中と云ふ名ハ元と揚弓の方に付たる名ある可し（嬉遊笑覽）其終る年を知らぞ其子都和泉掾と號す（竹豐故事）

文彌節

文彌節ハ岡本文彌よ起る此人ハ山本土佐掾が門人と云ふ天和貞享の頃にや伊藤出羽掾が芝居に於て一派と語り弘めしかバ文彌節と号して浪花中にもてハやし又俗耳鼓吹にハ文彌節ハ文賀と云ひし座頭の三絃が彌太夫と云へる者の淨瑠璃を合せて語りしによりて文彌と云ふと有れ共信し難し

左內節

左內節ハ左內（性詳あらず承應頃の人）より始まる江戶の薩摩が門人なり杉山丹後等と仝く流行せり

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

半太夫節

半太夫節は江戸半太夫に起れり幼名を半之丞と云ふ修驗者某院の子なり世事談始めは說經祭文の上手なりしを肥前太夫の勸むるに任せ淨瑠璃に變へて則ち肥前太夫に學び遂に一家を成せり江戸曲根元集聲曲類纂元錄は江戸名所咄に江戸半太夫が說經と有れば此比頃には未た淨瑠璃に遷らさりし者か潭海に半太夫は外記節より出たり又ゝ永閑の弟子なりとも薩摩左內の弟子なりとも云ふは取る可らす聲曲類纂

伊勢島節

伊勢島節は伊勢島宮內より起る承應の頃行はる宮內は虎屋源太夫の門弟なり享保二年二月十一日伊勢島宮內と改め後ち剃髮して節齋と号せり

外記節

此は薩摩外記（藤原直政）より起きり此も二代目薩摩治郎右衞門が弟子にして（潭海には永閑が弟子と云へり）長門太夫の甥と云ふ初名を小太夫と云ひたり

語齋節

語齋節は近江大椽語齋より起る杉山丹後椽の門人にして承應明暦の頃一流を語り出せり後ち薙髮して語齋と號せり俗稱は岡島吉左衞門と云ひ人形町に住み居たり

國太夫節

國太夫節（又た豐後節江戸節根元集）は宮古路豐後椽（橘盛村）より起る半中と号し一中の弟子なり（竹豐故事）後ち宮古路國太夫と改め一中節を變化せし先一流を語り出し享保三年十一月大坂竹本座に於て始めて芝居を勤め其より國太夫椽とて諸國に弘まる此の豐後節より仲太夫繁太夫薗八正傳等出さり皆な豐後椽か弟子なり就中宮古路文字太夫常盤津と号一派と語り出し今に連綿たり

式部節

式部は廣瀨式部太夫より起る始め万太郎と號す土佐椽（外記か門人なり共いふ）の門人なり後ち式部太夫と改め一派をなし貞享元錄の頃世に行はる富澤町に住居せり（江戸鹿鑑綱目）

新內節

新內は鶴賀新內より始まる富士松薩摩の門人なり本所松倉町に住す（本姓詳ならす嬉遊笑覽には江戸深川扇橋邊に住す一あり）寶暦の頃一派を語り出して大に世人に賞せらる若狹椽か門弟に非すと雖此新內が一流行はるゝ事器なりしかば家樂と鶴賀と改めくれなば我家門の繁昌ともならんと若狹椽か名に依りて背き難く則ち鶴賀と改むと云ふ安永三年八月六十と才にして病死す

嘉太夫節

嘉太節（或は加賀節と云ふ）は宇治加賀椽（藤原好澄）より起る紀州和歌山宇治の產なり伊勢島宮內か弟子にして宇治嘉太夫と號す元來謠に詳く其頃井上播磨か曲節流行せるを以て自ら工夫を凝らし別に一派の曲節を語り出し延寶五年十二月十一日宇治加賀椽と受領を拜す淨瑠璃本に謠の如く節章を付せしは實に此人より始れり寶永八年正月廿一日（一本には八月十一日）七十七才にして終る（墓は京都二條東順妙寺にあり）

手品節

手品節は土佐椽門人（或は伊勢椽か門人共長門太夫か弟子清五郎に學ぶともいふ）手品市左衞門より起る河東も此れか曲節を慕ひ節付に式部節と共に多く用ゐさりと云ふ（聲曲類纂）と有れは河東より少しく以前に流行せしもれと見ゆ

土佐椽

土佐は土佐少椽（橘正勝）より起る正勝は二代目薩摩治郎右衞門か門人（或は長門椽か門人とも云ひ又伊勢椽の門人とも云ひ綱鹿子には外記か流れとす潭海には外記より分れたりと記せり）にして內匠虎之介と云ふ一流を語り出し土佐少椽を受領せり寛文延寶の頃世に行きたり

角太夫節

此は山本角太夫より出づ虎屋源太夫か門人なり延寶五年十二月口宣を拜して土佐椽と改ひ始め相摸椽と云ひしが故ありて改めさり其終る年を知らず

若山節

若山は貞享元錄の頃若山五郎兵衞なるもの語り出せり其頃大に世に賞せらる又小唄を能して上手の聞え有り

次太夫節

次太夫は山本土佐椽の門人松本治太夫より起る初名を菅野傳彌と云ふ（都一中の門人とも云へり）貞享元錄は頃此の曲節を工夫せり

表具屋節

此曲節は表具屋又四郎より起る文彌か門人と云へり井上播磨の淨瑠璃を多く語れり貞享元錄の頃なるへし俗に又四郎節と云るは此なり節付は上品なる風なりと云へり

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

道具屋節

道具屋節ハ道具屋吉左工門より起る其師詳ならぬ井上播磨か淨瑠璃を多く語れり寛文延寶の頃盛に行れし曲節なり

說經

說經ハ日暮八太夫仝小太夫說經與八郎等共名高し何れも時代詳ならぬ京都にてハ昔ハ淨瑠璃流行せず說經與八郎共念佛以日暮林淸仝弟子林故林達等を斷へり云々（竹豐故事）是寛文以前の事なり其の始先詳ならぬ右の淨瑠璃多くハ佛經により因果の道理と演し人をして悲哀を感せしむるを以て習慣とせしより說經讃語なぞゝ名けて世に行れし者か（嬉遊笑覽）

祭文

祭文ハ寛政中小松大けう、みのか大けう、とて二人の山伏仝名にて能く此と語れり（嬉遊笑覽）左れ共其始め詳ならぬ（此他門談義、念佛なぞの流行せる由見ゆれ共其起原時代等詳ならされバ略す）

長唄

長唄ハ家々の系譜悉しきを得ぬ又た其流派の分れも詳しからされ共江戸にてハ中村勘三郎（狼若道頓と云ふ小謡の名人にして杵屋勘五郎仝六工門仝喜三郎等の三人此の人の脇師よりて共に小唄と好み一派を成せり）脇師杵屋勘五郎此の派の祖なり元和の頃江戸へ下り始て此曲節を工夫せり其終る年を知らぬ

常盤津

此祖常盤津文字太夫ハ京都寺町の町人にして俗稱を駿河屋文右衛門と云ひ（宮古路豐後掾か實子或ハ門人よして後ち養子となる共いふ）豐後掾を中興す（嬉遊笑覽）元文の始江戸に下り中橋れ邊に住居を始めハ宮古路文字太夫と云ひしが元文四年宮古路れ曲節國家より禁せらる依て關東文字太夫と改む是れ延享四年なり然るに亦た關東れ文字禁せられ再び改めて常盤津と云ふ（其頃常盤橋の邊に住し故に斯く名來ると嬉遊笑覽に見ゆ）自ら一派をなし安永十年二月一日病死す其年詳ならず

富本

此曲節の祖ハ宮古路文字太夫か門人宮古路品太夫なり（俗稱福田譚司）師文字太夫常盤津と改めし特よ共に仝姓に改め名を小文字太夫と改めたり延享六年師と絕ち後ち寛延二年十月或ハ云ふ寶暦二年富本豐前掾（藤原敬親）と受領す自ら一派を改めたり明和元年十月廿二日四十九才よして終れり男馬之助豐前太夫と改む此れ二代目の豐前掾なり門入數多にして枚擧に遑あらず就中豐太夫齋宮夫大和太夫常太夫等上手の聞へあり

淸元

此節ハ淸元延壽齋ぶ起る元と横山町に住し茶弁に油を鬻し岡村屋藤兵衛か男也幼名と吉五郎と云ひ弱年より淨瑠璃を好ミ延壽齋（富本齋宮太夫の号なり）に隨身して齋宮大夫の名讓り受け延壽齋の脇を勤む師沒して後故有て豐後路淸海大夫と改む（文化五年）然るに淸水の姓絕えんと歎き淸水の末荒井氏の望に依り改めて淸水と名く文化十一年市村座へ出し時故有て淸水を改め淸元と号し延壽大夫と名く一派の曲節を語り出し世よ賞せらる薙髮して二世延壽齋と云ふ文政八年五月二十六日に終れり門人數多擧て數ふ可らず

大夫れ受領

永錄年中六字南無右衛門（其傳詳かならぬ）云ふ女太夫京四條河原に於て淨瑠璃操芝居を興行せしか夫より次第に弘まり珍らしき慰ありとて大名高家の奧方幷に所々へ召出され後にハ大閤秀吉公の御上覽にも入り剩さへ慶長年中よハ禁庭へ召出され叡覽に及びしより淨瑠璃大夫に受領を勅免成りしなり（竹豐故事）と有り又た一說よハ昔し人形遣ひ（則ち傀儡）の禁庭へも出て大ぶ堂上方の賞美する所となり此の故と以て官位を授く後ち人形遣ひと淨瑠璃と一致せしより大に人形遣ハ名聲を失ひ遂に官位迄も淨瑠璃語りよ奪れるゝよ到りしと云へり何れか是なるか暫く記して識者を俟つ

淨瑠璃制作家

昔ハ淨瑠璃制作家と極りたる人ハなし俳諧師或ハ遊人杯の慰みに作りたるなり中昔暦と云ふ淨瑠璃ハ西鶴の作なりと云ふ天和の頃近松門左衛門（本姓ハ杉森信盛）始めて此を產業とせり（此の人始ハ堂上方よ仕官して其後近江の近松寺に遊ぶ故に此と苗字呼べりと音曲道智論に見えたり）此の人博學碩才ぶして當時の人情を察し世間の世話を能く呑併し百余番の淨瑠璃と作られたり其文句玄妙不思議人聞て感せさるハ無し元祿の始め歌舞妓芝居都万太夫座れ狂言作者と成り又た宇治加賀掾の淨瑠璃も作れたり其後大坂へ立越へ竹本筑後掾か作者となる享保九年十一月廿二日七十余才にして死去す号ハ平安堂巣林子法名ハ阿耨院穆矣且具足居士と稱せり此の流を汲む人ハ紀海音、竹田出雲、松田和吉、並木宗助、安田蛙文西澤一風等なり（操年代記）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

漁夫（韻文）

平山靜子

（一）

月かげ冴えて風寒し、
岩根は松ともろともに
かこち嘆くも汝のみか、
肌あはたつ夜さむにも
そらねの夢もむすび得ず、
泣く音にいつもおくられて
木の葉に似たる舟の中
語らふ妻もなぎさとを
妻のひとみは朧にて
隔つるまでも立ぞみて、
なく音をいだくみどり子に
戀しむかしの我が妻よ、
貧しき日々のくらしには
やすめば餓うてふいまはしき

（二）

遙の沖のいさり火と
それかあらぬか白波よ
きらめくつかの間なりとも
つかへ安めてくきよかし。
これやこの世の別れには
空さへいとゞ定めなく

渚によする浪はおと、
浮世のうきとかこつらん。
月と星とをいたゞきて、
いとしき妻ともろともに
つまの涙といとし子の
はてさへ知れぬ沖中に
これぞ今宵の家居かも。
なぎてはあるゝその折と
うたみの姿とし白波の
そてゝ涙に袖絞り、
忍びておそは歸るらむ。
渉身のたえのたつきぞや。
一日ありとて休まれぞ、
報ひのあるを如何にせん。
戀しき夫の船あるか、
我に教へていなづまの
それくるしき此胸の
夜な〳〵夫の出づる毎
楢の木の葉の散る頃は
なさけ白波あるゝとてか

なな氣づかくしつまの身て。
早く歸りて玉へかし。
我が身は露も礒菜つみ、
思ひまいせばこの稚子も
かゝる夜半さへいとこそに
花にたぐへん面かげも
いつの此子の姿をも
可愛の稚子の身の行方

（三）

空かきくもる雲間より
浪間をにらむ物すごさ。
雨は篠つく如くなり。
たぐへし涙も今てはや
のくとはさらにけふこそは
空の色さへ氣にとめず
うたゝねしたるわかうどは
力の限り櫓を押せど、
もり上げられつ下ろされつ、
よするまに〳〵たゞよひて、
かゝるありさま見るよりも
泣けぞ叫へど訪ふものと
歎きの涙つくるとも
千尋の海も何のそれ
にすぐれてはかなきは

獲物は如何に少なきも
たとひ一日ハ餓ゑしとて
夫と此子を養はん。
年たけたらんあかつきに
漁りせねばならぬ身の。
うき世のあだの潮風は
黒く染めなす事ならん。
あぢきなき世のきれそかも。
此世の運も月影の
みる〳〵風は吹きなをて、
潮水に笑めるさゞなみに
獅子のうそぶく有様も
うろくぞあまた得んものと
網とおろしつ船ばたに
この有様にふためきけり、
其甲斐とてはなら波よ
行へいづこの白波の
ものも岩根になきがらの
妻ハ心も狂ひつゝ、
峯のあらしの外ぞなき。
りきぬ心の悲しみは
はかなき夢の世の中に
漁る人の身の上の。

脚氣病説　（醫科大學敎授醫學士三浦守治氏の説摘要）

約言すれば『脚氣病なるものは實に一種の中毒症にして夫の所謂傳染性多發神經炎なるものに似ず』と謂ふべきのみ」余は玆に於て『脚氣は或る一定の魚肉を食するに因て發する所ろの中毒症なり』と斷言するなり

此論案に據るときハ人輙く諸種の事實を説明し得べし

（第一）脚氣は主として一定の海岸及大都會に於て頻發する所ろの病症なり而して海岸ハ實に魚類を捕收するの地なり又大都會（東京西京大阪）ハ多く魚類を輸入販賣するの處たり故に我考案を以てすれバ此場處に於て脚氣病の頻發することは毫も怪しむに足らざるなり○近時同病の我國內地に傳播したるも亦是魚類等の運輸其便を得たるに因るならむ

（第二）歐米諸國人の我邦に住居する者にして脚病氣に罹る者殆ど或は全く無之と謂ふて可なり○是れ他なし（我考案を以てすれば）唯外國人が魚肉を食すること本邦人の如く頻多ならざるに因るなり○或曰『外國人（白皙人種）は一種特異なる素質を有すると以て脚氣病の侵襲を被むらざるなり』と○余以為らく此論は必ずしも當を得たるものに非ずと○之を成書に徴するに「脚氣患者の比例は土人（印度人）六人歐一人の關係なり（Waring）」或は「歐人亦脚氣を患ふ唯之を土人に比して稀なりと謂ふべきのみ（Radley）」等の報告有り又聞く所に據れば和蘭陀國の戍兵にして印度地方に在り土人の食物を仰ぐ者は頻々脚氣病に罹ると云ふ而して此土人の食物とハ何ぞ余は之を詳知せんと欲して未だ能はざるなり雖然ヒルシ氏成書に就き彼土人の食物に關する報告中屢々米乾魚魚肉鹽漬魚野菜等の字を發見したり○之に據て余は略々「歐米人多く魚肉を食せざる者は殆ど全く脚氣病の災を免かるゝにも拘らず同人種にして印度人の食餌（米飯魚菜）を仰ぐ者は頻りに同症に罹る」ことを知り得たるなり

（第三）日本人の曾て（在本邦）屢々脚氣病に罹りたる者が歐洲（脚氣病無之の地）滯在中再び同症を患ふること無き（余が明治十四年より同十九年に至る迄異國に在て見聞したる事實）も亦偏に副食物變更就中吾人が殆ど全く魚肉を去り而して獸肉を食するに致す所ろなりと思考す○又某氏は謂へり『本邦人の東京府下に在りて毎年脚氣病を患ふるに苦しみ試みに日本食（米飯魚菜）を止めて所謂西洋食（麵獸肉）に就き爾後全く同病に罹らざるの例は余が屢々耳にする所ろなり』と（上記の帝國海軍に於ける成蹟に同じ）

（第四）我帝國陸軍の脚氣患者ハ明治十九年虎列剌病流行の際に於て左表の如く非常に減少しゐり（陸軍省醫務局十二年報に據る）

年度	脚氣患者數	死亡數
十八年	六千貳百參拾二人	六十三人
十九年	壹千五百六拾三人	四十四人

我考案を以てそれを右の如く患者數一時非常に減少しゐると見るは當局の人が虎列剌病を豫防せんか爲め兵士副食物中大に魚肉類の需用を制限したる」に由るあらざるを得んや○聞説高木兼寛氏は毎年夏期に際し虎列剌病豫防の爲め海軍兵士（全く脚氣病を免かるゝもの）の副食物中（輕るきもの即ち鰈等の外）殆ど全く魚鰕の肉類を禁省すと云○然らば陸軍に於ても亦夫の虎列剌病流行の時に際し海軍と均しく該病豫防の爲め魚鰕の肉類を制減せらき（我考案を以てすれば）随つて脚氣患者の著しく減少しゐるとは問はずして知る可きなり○老醫某氏等も亦謂ふ『虎列剌病流行の年に於て脚氣患者を見ること比較的甚だ少なるとハ實に不審の至なり』と余ハ我考案に對照して毫も之れを怪しまざるなり

（第五）東京市等に在て他縣より來り住する人（學問を脩むる者等）が殊に脚氣病に罹り易しと謂ことハ則ち正確なる事實なり○人若し「此他縣より來り住せる者（學問を脩むる者等）が先づ何れの處に寄宿し而して何等の食物を口にするや」の問

題に就き之れが精査を遂ぐるときハ必ず脚氣と魚肉とハ關係實に大なるを覺るべし（此件に就き取調たる事實ハ甚だ貴要なれども述者ハ有故て之れを世に公にするを欲せず○其一班ハ東京醫學雜誌三卷第廿一及廿二號に在り）

（第六）古來人皆轉地療法の脚氣患者に對し最も必要あると賞揚して止まず○余も亦必ず此事有るを期す然れども余ハ倘を知らんと欲す「脚氣患者が地を轉ずると同時に自のづから食物と更ふるに至ると無きや」と○又轉地に因て全治したる患者の最多數ハ初め轉地と爲し得たる者即ち其病症ハ敢て重劇を以て名つく可きもの（轉地の際に於て運動に由り諸徵增進せるの惧有るもの）に非ざりしや明かなり如此患者が後日に到り遂に治癒の域に達し得るとハ敢て奇と爲すに足らざるものとす○又重症脚氣患者が唯「轉地療法ハ偉効有り」との說を信據するのみにして「運動の殊に此重症に對して有害なる」とを察せず往々車上或ハ船中に於て悶絶することも有るハ吾人の屢々見聞する所ろあり○己上余が轉地療法に就きて述べたる所ろの趣意を約言すれバ『地を轉ずると同時に食物も亦自のづから更ハり依て病者ハ復た夫の脚氣毒に接するの患無きに到る○輕症患者に對しハ（人の唱ふる如く）新鮮なる空氣中に棲息する精神閑なるを得る等亦與かつて効有るべし○重症脚氣患者ハ決して轉地を企つ可からず』と謂ふに在るなり

余ハ固より強て之れが說明を爲したるに非ず又好んで奇異を唱ふるを敢てせず余ハ倘ほ只管諸君等の敎訓を望み隨つて聞き（其理に敬服するに於てハ）隨つて自ら改めんと欲する者あり

余ハ是より一步を進め『我所謂毒魚なるものハ何の種類に屬する乎』及『脚氣毒とハ已に魚肉の新鮮なるものに在て存する乎將た其陳敗するに由て生ずるもの乎』と謂る問題を攻究せんとす

（甲）我所謂毒魚なるものとハ何の種類に屬する乎

此問題を解するにハ先づ左の諸項を參考するを要す

（第一）脚氣病者ハ每年頃に五月を以て增加し八月に及んで最も繁多となり而して九月及十月の交に到り急に其數を減少す○是を以て余ハ先づ毒魚の三四月頃より八九月の間に於て多く漁人の手に入り次て市場に現出するを概知し得るなり○余之れを精査したるに青魚科の魚類即ち鰹、鮪、鯵、鯽、鯖、鰆等ありとす

（第二）脚氣病ハ殊に書生兵士職工雇人等を侵すと極めて多し而して又高貴の人にして此病症に罹る者無きに非ず○因て余ハ「我所謂毒魚なるものハ其需用甚だ繁くして其價直も亦極めて廉（故に書生兵士職工雇人等の食する所と爲る）且多少美味を有し（故に高貴の人も亦好んで之れを食す）而して洽ねく本邦人の好嗜する所のもの」なるを思察し得るなり○我調査に據れバ是れ青魚科の魚類に外ならず

（第三）脚氣ハ主として亞急性或ハ慢性の病症なり○是に據て余ハ（脚氣毒を有する魚肉の頻々患者書生兵士職工雇人等居多）の口中に入り漸々其身体を侵し以て遂次に種々の病徵を呈するに至ると」推考す

（第四）帝國海軍（全く脚氣病の患無き處）は虎列刺病豫防の爲め每年夏期に際し兵士の副食物中必ず鮪、鰹、鰆、鯖、鯵、鰯、鯔、海老等を除き唯稀に鰈の如き魚肉を用ゆると有り（他ハ皆獸肉を供用す）と云

（第五）東京集治監及監獄署（脚氣患者無之處）に於てハ唯鹽鮭、鹽鱒、數ノ子、干鰯、飛魚、鯡等の數種を以て囚徒の副食物に加ふるのみにして殆と全く青魚科の魚類を用ひず

（第六）帝國陸軍の嘗て多く脚氣患者を出したる諸隊の食物を審査するに應用の魚肉中殊に鰹、鮪、鰆、鯽、鯵、鯖等即ち青魚科に屬するもの最も其多數を占むるを見る

（第七）脚氣病を頻發するの地方に於て多く見る所ろの魚類ハ青魚科屬なり（但し右魚類を捕收するハ時期各處に於て多少

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

の差違有り〇此點も亦考へ思はざる可からず）又同病れ侵襲を被むらざる地方に在りて青魚科族ハ甚だ稀有或ハ全く無之〇九州に於ける某地方（殆と脚氣病と見ざる處）の如きも多く鮪鰹等獲收すれども人之れを食すると稀なり

（第八）之れを書冊に徵するに南亞米利加及印度等に於て脚氣病を發するの地は凡て青魚科の魚類ゝ富む

余は右八項の事實に據り敢て『脚氣病は青魚科の魚肉に因する中毒症なり』と謂はんとす

（乙）脚氣毒とは已に魚肉の新鮮なるものゝ在て存する乎將た其陳敗するに由て生ずるもの乎

余は左の三項を擧げて之れゝ答へんとす

（第一）レウィン氏の著書中己ゟ陳敗したる青魚科魚肉の有害なると說けり

（第二）本邦人も亦一般に鰹、鮪、鰆、鯖、等の新鮮ならざるものは屢々急性中毒れ症狀を起すと有るを知る〇俗人も此際「鰆或鰹に醉へり」等の語を用ゆ

（第三）脚氣病は殊に書生兵士職工雇人等に就て多く實驗する所ろの病症なり〇故ゝ余も大ゝ「此食物調理を擔當する者ども或は魚肉の廉にして又其最廉あるもれ（新鮮ならざるもの？）を供用するの傾向無きやを疑ふ〇若果して然らば彼等は不識不知して屢々新鮮あらざる魚肉購求し誤つて之れを他の食品ゝ充つること有るべし（但し健者及患者殊ゝ慢性腸胃病者に在て其食する所ろの魚肉假合極めて新鮮なりと雖ども腸管中ゝ在りて腐敗するに到り以て毒物を釀成すること有る可きは論を待ゝざるあり）依て余も「青魚科魚肉の新鮮あらさるもの殊に有毒あるべし」を推察す

巳上縷述したるものを統括し遂ゟ次の考案を得たり

脚氣は一種の慢性中毒症なり而して此原因は青魚科の魚肉就中其新鮮ならざるものゝ在るなり

愛の板ばさみ

小林東天紅

發端

何時何處ゝ災害ゟ落ち來るか、將た幸福が湧き出るり、豫ゝめ世の中の人に知れぬところが抑運命。生れたばかりで浮世と云ふもの、面白いものか悲しいものか其れも知らずに、慾も無ければ望も無く、唯一つの産聲をかたみに殘して、はかなくも冥土に其儘の旅出するもの是處に有れば、彼處ゝ白髮長く餘生を樂しむも有つて、之と求めたとて得られるものでも無く、避けたとて除ゟられるものでも無し、思へば人の心で之を苦勞するのは無駄な事、むしろ棚からぼた餅寐て待つが氣樂です。が、さて出處不明れ其の運命、苟しくも其ことの人間一生の習慣の種ともあり、進めば固有の性質れ一部を變へもし、また作りもそると思へは、氣樂にも出來ぬ事です。ならぬ氣樂に出來ぬ、さりとて人れ力で如何ともする事ごの、暑さ寒さも其れ程とも氣も付かぬ事とて、身を錦に埋め果て、年が年中、世は樂だと喜んで居て、他人からは羨まれた程の、山本何某の家にも此度の失墜。主人と云ふれも馬鹿では無く、むしろ氣は利き過ぎたと云ふ方で、其の小才利きな爲めに、却て力負けをした始末。親の代から苦勞ゟ儉約、積ゝ積むで何萬と數へるまでの身代、其れを一朝の失敗に消して仕舞つて、余所の見る目も哀れな今の身の上となりました。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

此れも世の回りあはせ、と夫婦は毎日歎き續け泣きくらして、殆んど手に就く仕事も出來ず。しかし悲しんでばかり居たところで、果ても無い事とて、又運も良くバ！と自分で其身を慰めも爲る、其れでも流石に其の前の樂しさを思ひ出すに就け、悲しさと口惜しさに胸は滿たされて、將に世を果敢なむばかり。幸ひな事には此夫婦少しは考へも有る人、つまりは自分の身の至らぬ事からと思ひ切つて、其代りには一人息子の時三郎を良く育てゝ、天晴再び此家を興させ度いと望み、苦しむ中に兩人の内職の收入と、儉約に儉約をして學校へ通學させました。

其からと云ふものは、未來の杖とも、柱とも、爲るのは只時三郎一人。勢ひ毎日夫婦替り替りに、膝先に息子を呼んで＝勉强して一刻も早く家を興せ＝と言ひ聞かせるのが其日の勤めともなりました。

言ふまでも無く、樂に捲かれた華族育ちの時三郎、大事がられただけに世間知らず、

今年十二と云ふ年齢の割合に賢かしく無いかわり、幸に惡い事を知りませんでした。云はゞ經驗も無く、確乎した心も無い、わるく見て人間だと云ふところは、身体に毛の生へぬ其ればかり、良く見立てれば淸淨無垢の小供ながらの聖人、たゞし其れは本來何にも出來ぬ不具と生れ出たのでは無く、たゞ親の姑息の慈愛、爲せなかつたと云ふ丈けです。其の身今の家の變事とて別に氣に止める事は無い、むしろ氣が就かぬ。

たゞ學校へ行く事は、此の兒に取つては一大義務、また一大事業、今時三郎の履歴を書けバ、生れて、學校へ入門して、と云ふ純の純文、奇な事も世には有るものです

小兒の内は兎角風次弟、親の勸めに時三郎は異儀無く學校へ通ひました、其内に友だちも出來て自然面白くあるに連れ、時としては何の氣無しに否になる事もありました、其れを兩親昔の身なれば、四の五の無しに、泣き聲に降伏して休ませもするところを、今は只學問を勵ませたい望み、其れにあたりの小兒の賢かしさも目に附いて余程覺えかゝつた事とて容易に許さず、雨に風に父親が自ら送り迎へしても休ませない程。次弟に少しは人の話を聞いて世間も知る、學問の力は大きいもので何彼に氣を留めるまでに爲りました。

或る日の事、學校から石盤抱へてキヨロ〳〵と彼方此方を見ながら時三郎は歸へッて來ました、其途中で不圖父親に逢つて一目見ると、下駄の鼻緒が切れて、すげるにも生憎糸紙一切無し、困り切つて居るところ。自分の親とて見放しも出來ず、風呂敷包に懸けて有つた紐を解いて共に手傳つて假に其場を濟ませました。何でも無い事ながら歸宅して后に其話しが出た事と見へて、時三郎兩親から大の褒辭。取り別け母親は目淵に慈愛の波と寄せて褒めそやす、其笑顔が時三郎には、何時に無く嬉し

く、忽ち身ハ極樂にでも行つた樣よ爲りて、面白くそして愉快になりました。

神とも見、佛ともし、さて果てハ吾身とまで子供心よ思ふのも唯兩親。其の笑顔ハ珠玉の賜より有がたく、其の優しい言葉ハ天の音樂とも聞こえるもれ。時三郎も亦其の嬉しい賜に預かつて、后日の記臆よ其日の事が殘る程。

親も親とて、何時でも喜びよ就々、悲しみに付け、兎角此れを持ち出そ、果てハ如何あつる事かと云ふに、自然親を樂ませて笑ひと望み親を喜ばせて優しい音樂と求める、此れが時三郎の心に充滿して、其反動親に怒られ度く無い、いやな顔を見たく無い、勢ひ能く從順となつて孝行と云ふ光りの凝形、何時の間にやら時三郎の心に生へました。

追々と年に連れ、時三郎の學問ハ進んで最う一年で小學校ハ卒業とまで爲つた三人の喜びしかし今此よ一つ、時三郎の心に不審を起させたのハ、時に依ると所謂なしよ兩親かいやな顔をする其事。幸も烈しい事も無く其儘に爲つて居ました。するとあはれ或日の事、兩親が活計の事で密々相談の聲、其れとも識らず障子一重隔てた時三郎れ耳にハいつた仕儀。兼ねて起つた不審が勢ひを添へて立派に時三郎の心が不安心の種を作りました。なる程、思へパ女中の居なくあつたのも其れ故、引越したのも其れで有つたか！ 思ひ當れパ脩々心配も增す事、彼れや此れやで、胸ハ安らかにありませぬ、

文學小言

硯友社風の批點

硯友社諸氏の著作よ對し、第一に目に付く一種の奇風ハ或る種類の語ゟ限り、假名で書き、之に批點を附けた事です。そして主にこれらは方言の俗言である處を見れパ要するに翻讀の便を料ッたゝめでしやう。が、吾々のら見てハ夫程の必要も無さゝうでそ。

文學部内の一喜一憂

無暗に「……」を用ゐ、矢鱈に序跋を彼せる事の絶えた事、美文の續々現られる事、韻文の萌芽を出した事、以上喜ぶべき事です。言語學研究の思想の乏しい事、重文學の流行せぬ事、以上憂ふべき事です。

●五七と七五（雲峰氏へ）　美妙

雲峯氏の韻文「如盛」、それを昨々月の當紙（改進新聞）で美妙も評した、其説に對する雲峯氏れ反駁ハ近刊の女學雜誌第二五四及び第二五五の兩号で確よ見ました。要そるに雲峰氏ハ七五が五七より優ると云ふに過ぎぞ。即ち五七ハ七五より優るも美妙が言ッたと雲峯氏ハ心得、之に對して抗論されたのでそ。但し、此前の美妙の評文を今一度隋讀も願ひたし、美妙ハ五七と七五とを相對的に比較し、品題の如何に因てハ五七が七五ょ優るとハ述べました。雲峯氏が心得られる樣よ五七ハ何が無し七五ょ優ると絶對的ゟ決して述べそ、從ッて又今後れ韻文家をして全く五七を捨てろとハ夢にも言はず、只々從來の七五以外に五七をも用ゐるがいゝと述べるのでした。

但し氏の五七及び七五比較論に對してハ美妙も大きに異見が有ます。氏こそ單獨よ、絶對的よ五七を拆斥する人でそ。氏の意見でハ五七といふ物も其實七五の順序で無くれパ讀先ぬとのこと。但し美妙よハ分りません。句讀を附し得て五七も暢こ讀み得ます。或る程從來の和歌や俳諧、七五專門の物を通讀した句調を其儘でハ迚も五七ハ讀めますまい。が、此先例と土臺とし、苟しくも此先例に外れた物ハいけぬと云ふ斷言が其處で直に出來ますか？ 御存じでも有りましやうが、舊幕の末年こ書生が詩を吟ずる事が流行ました。「月落鳥啼」や「男兒志願」が一時の人口に膾炙して、其果ハ

俗曲にも之を掛ける事さへ爲りました。其場合に於て、三味線に掛ける工合ハ正に詩の吟じ方と成るたけ違ひはせず、例の意氣日と貫くと言ふ勢をも充分含んだ、此事實を雲峯氏いどうし〻事と思し召すか、御意見も伺ひたいです。漢詩れ吟じ方といふハ一種風變りなアイアムバス。之に勇壯の味の有るのも所以れ有るまと。そして七言ハまだ夫程で無いもの、其五言に至つてハ之を日本語で吟調して大概が五七体。或ハ五七の變体です。「壯士髮衝冠」サウシ、ハツ(五)カンムリナック(七)、犬吠滿山濤」イヌホエテ(五)マンザンキヨン(七)、是等ハ皆その例。五七と限るにハ及はぬ物の、多數を言へバ即ち是です。元より漢詩の吟じ方ハ完全の格調を爲した物でも無し、是が有るからと言つて其儘で五七を辨護する譯にハ行きません。が、日本に迚も五七ハ當て欲まらぬと雲峯氏が斷言を爲れるに至つてハ其當て欲まらなくハ無い例として前の漢詩云々も勢ひ引いて來たくなり升。況んや又五七が日本に當て欲まらぬと云ふ雲峰氏の口實ハ纔に誦讀れ一點にる在だけの事。承服ハ出來ません。韵文ハ讀むものか、吟ぜるものか。言ハずとも吟ぜる物とハ雲峯氏も御存じでしやう。

また是非さう有るべき事です。若も讀むだけれ一點うら讀みよくれ故いけぬと云へバ雲峯氏が折り〳〵譜を假りて作られる讚美歌類も亦以て日本にハ適せぬ歌です。ある程ソングとポエトリーとは違ふ。併しながら美妙の言ふのハいくら誦讀に不便だからとて唯其一點からして其格律を排斥する事ハ迚も出來ぬとの一事です。また況んや五七と言ふもの、之よ完全な調を付けて謠へぬでも無し、詩に似寄つた讀〻方で流暢で讀えぬでも無し、いよ〳〵以て一概に之を擯斥せる點よハ承服の意を表せません。

格調を雲峯氏が韻文に於て何バきるのハ大に美妙も同意でも美妙が五七五を以て一脚とした韵文を日本評論に出したにつ いて雲峰子が俳諧句調と評された事、是もなか〳〵の適評と美妙も心から思ひました。然しながら是からして美妙が韵文を全く以て俳諧に則るやうに斷言を爲れたれハ近頃服し難い御言葉です。俳諧のある種類の欠點、如何にもそれを摸するハ惡いです。どうかと思つて實ハ美妙も日本評論紙上「其儘れ花」で試みて、思つた程にハ行きませんでした。が、之を俳諧口調と評されたのハそれ故適評と心服します。併し五七五と切捨てゝ什舞つていゝものか、なる程五七五ハ俳諧のある一種の方に地面と暴されも爲ました。が、連句言掛けの類ハ上古にも有つて五七五の雅馴な調べもなくハない、これを全く捨てるのも美妙ハ痛惜しく思ふれです。御考へハどんな物が、天晴これとも取り用ゐて嘗ハ正宗とも使ハきた名刀、赤錆を落す御心ハありませんか?七五調もわるくハなし、但し五七も捨てられぬとれふ、是が美妙の意見です。わざ〳〵反駁して下さつた御熱心ハ洵に有難く存じまする。

花おりよしき

藤廼家ゆかり

第五回

江天一色無纎塵、皎々空中孤月輪、江畔何人初見月、江月何年初照人、人生代々無究巳、江月年々望相似、不知江月照何人、但見長江送流水と微聲に吟ずる聲と共に障子を開けて小使作「旦那樣御隱居樣か御出遊ばしました道行「さうか御出迎申てこやうと親に事ふる禮讓の立ひとをるとき入來る道行の父道義六十有餘の老人なからまだ壯健に見受られたりお照は煙草盆と敷物と持來り照「今日者少しひへますやうでござりますと禮義もさすがまとやかに述終り茶菓を進めて慰めつゝ勝手へ何にか道義の饗應といつけむと立ち行後に道行は聲潜め父「おまへあの子を引道行「ハイあれはお照と申まして原も士族の娘少々不仕合せで幼少から人にもらされて難義すると申こと故憫然に存小使に遣つて居りますあか〳〵志がわりますから學校へやりまそが大方上達致します人が女の子だから色々に申ますが世上は男女の區別なく相扶るゝが存しまかて御相談申しませんが世話しでをります父「それならよいけれど人の口は八釜敷から尋ねたのだが吉村れおけいとも丁度年もよし財產もつり好合の緣元々他人でもないから都合もよしあちらではよこしたがつて居るから今のあとに貴樣が熱心であけりやおけいをもらうとするがれ〻三十に近い年女房を持あるれどいふもなむまりおかしなものだ貴樣の返事しだゐすくきまる道行「私か望がわりますから女房を持つて面倒と存まして獨でをりますもし兩三年でよろしうございませう是非海外へも參る積まで思ひ付の事を致して居りますまた出來ませんから一家に仕舞ておれます大人にさへ御覽に入ません充分出來致しましたら萬圓の金は得る積りです三四年は留學して歸朝の後妻を求めとりましやう第一日本人て女房を持れがはやうおさいます二十や二十五はまだ小供です私も小供の內ですからさう急ぜとも緩々やりましやう御存の通り友人の交際で吉原へも花柳れ中へも參ますが決して一宿して歸ることとありません女房のところはお待下さいナニお照がゐるくらのなん

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

のと申次第ぢやございません父「さう聞ばけバ敢て進先らきもまないが乃公も厭年だから貴様の身を極ておかうと思ふからのことゝ志と立る際にはその位であけれバその位でなけれバならぬいゝやうにするがいゝ吉村でしきりに迫るからおけいも尤も音樂を専門にやつて居たんといつて居るさうだから両三年後でもよからう約束だけしておけバ、夫も人ハ生身だからどうんぬまちがひのないともへゝあいけきや先と考へちや何一月も生てゐらきやしない磐梯山が噴火して村落ハ人々ハ災難が降て沸たやうなもの一夜のうちにも別々ないがそれハそきこれはこれとして約束しなさい婚禮ハ其時としてエー道行「へ、イ私も一生の事ですから考て御あいさついたしましやうナービールかきてとりますす一杯つきましやう「ナートさうハ香ない（ストク）か大増上等だ乃公ハ是非歸らなけれバならぬ用があるからステーシヨン迄車をいつてやつてくれ道行「ハイ今はお松が吉村へ行ましてまた歸りませんれ照や長助に内け車でおとつさまを送り申せとしたくさせておけ照「ハイ道行「姉さんハいつも御機嫌ですか父「われも弱質から困る進一（孫の名）ハたづら盛りでなか〳〵目がはなされぬ乳母では敎育が充分でないと自分かしきりに骨を折て居る幼稚園へ出してからすこし樂になつたようダー最少しつぎなさい醉たやうざから小使作「大旦那さま車の仕度が宜敷ございます照「さうかまた其内に來るから克考て返事をしてやるがいゝ極るなら乃公も聞ずとよいお松にでも吉村へいつてやれバいゝから帽子がそこにあるかアーいゝ機嫌になつた照「お悦ぶのうのでございます長介さん氣をつけて切符も買てさしあげておくれ道行「左やうなら御機嫌と見送まて我室へ歸り來り道行「お照一寸爰へおいでひとつお酌を頼ます六十七番は學校ではなにを讀でるのだへ照「ハイ英書ハウユルソンの第一と算術を晝前漢籍ハ十八史略の二を讀で居ります道行「大勉強したねおまへは一番何が好だ照「私は普通だけやりましたら實業を致したうございます道行「それもよからうこれから工業社會になるから女でも工學士とか又技士とかになるもいゝ醫術も西洋では女がなか〳〵やるさうだ…今も日本に隨分女の先生が出來たは照「私は自分でバかりやることもより多人數に授けられる業がなしとうございますたとへバあなたが理學士でおいて遊バして精しく理化のお調が出來又私が今ゟりとつの業を妙手にやりましても私のみに限られては人に讓ると申譯にはまいりません誰にもやさしく出來るやうなことを考へて多人數で利益をはかることを致したいと存ますまだ〳〵年が參りません

から六七年の後目的を立る積りでございます今も少し考て居ますが申上ることと出來せん道行「人はそれ〳〵目的があるから能考へて夫を遂けるかい、なんにしても普通の學術も知らないとこまる勉強おしよ外でもないがお前が四五年たつてから私の女房になつてもらたいと思ふが厭かへ聞ておかないと私も目的があるからと言れてお照は耻紅葉なんと返事をなさんかと差うつむいて答へなし道行「ナニ厭なら無理とはいはないよ世話をしてわけるからとて決して是非女房にしなけりやならないといふのぢやないおまへのこゝろがけがよいから私にわまる力がなれた教育してわける世に對する義務それは男女と問はない積りサー後にもまゝあへでも好むところへ嫁ふもやりもする其時私の妹分にして相應に出來ることゝしやうとれもふけれどおまへの厭でなければ内はおかみさんになつてもらおうと思ふのおまへのこゝろを聞たうへお爺さんお従妹はおけいを極ろと謂うからそれで今日は私の心を打明てはなすのさーコレ〳〵ビールもお香お菓子をわけようなんだへ泣のが厭ならいゝから泣かなくも別るじやないか怜悧しくさるれバ猶かなしくおてるハ袖を顔にわて道行の膝に打伏して聲を忍びて泣出しさり道行おてるを引取るに升屋の女房へ手當金三十圓餘を送り籍も相談のうへ引人の植木屋半七方の養女分とし着類何くれ身の廻りの不自由なく調へ山手六十七番館の女學校へ通學させ其身も暇あれバ敎へなどしつ今は月琴瑟かれ類ひまで學ばしむれバ一層艶色打上り禮儀作法克拼へいかなる貴人の姫君といふも恥かしからぬ風俗なれバ道行尋常の人なりせバおてるを妾ともなすへけれど望みなる身の其うへに女子ハ天性弱質にて男子の保護を得る身を知り又貧困にしておてるが敎育を受ることあらさると惘れみ人を愛する男女を限らずと義務を義務とし戀を戀とぞ流石理學士の實地應用人情も亦「ロジック」に訴へおてるへ對し意を明し告けさりしも妻をめとるの相談出來るにつけおてるが心を探り見んとかくハ咄し出せるなり「なくにさへ笑ハいるかに時鳥と彼の秋色が發句の如く西施が嚬ハ笑ふに過ぎ雨を帶たる海棠ハ青天の色に勝るとおてるが泣入る姿ハ常の愛嬌に百倍して道行が感と引起したりこれまで一家に住と雖も側に近づくあれに今泣伏して膝により吾身に親密寄添たきも心魂替るべき筈なるに道行又理性に賢くこゝにおいて謂らくおてるまた貧困に成長すれども志高く又色氣ハ別て淡白にて色のちまたあ身をよすると雖も色に泥まず只管學業を勤めたりおてるは兹に呼とられ道行を親とも兄とも依頼せしに突然女房の返事に

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

さしつかへ泣出せしものあらん又吾膝へ打伏せしハなまへての業と背德さそア道行「チイおてるサーサー最堪忍してなげるおかみさんになれとハいはない情出して勉强しなされお極が歸るとき笑ふに大概なものなら十六になれハ情人の一人位あしらへるせ困る子でハないのあとけないも程のあるそのくせ世間も學友を呻しをするところハ別ることを言たぢやないかコレ〳〵此時お照ハ目の淵をあかめながら顏を上げ容と正しなにか言出んとするに勝手にてお松の聲したり折悪くや思けんあたりの怀盤をとりかたつけて道行か顏さしのぞき目に含む涙の玉と心とを殘して常に己か住む部屋のかたへぞ過ぎぬ

著者曰ふ馬琴翁八犬傳を作るに信乃濱路の情を評して曰く濱路か貞節は爲し得べし信乃如きハ得かたき男子なりと道行信乃の困難の位置にたゝせむてるは親に忍の苦情あるにあらず妾たらしめんとすれバ妾たり妻たらしめんとすれバ妻たる自由自在の身なれどもむかてるを不義に陥らしめずハてるがまゝもらしくしておやこげあるを又得べし道行が如きと得がたき男子信乃大丈夫信乃に比せは右せんかコハコレ著者は過賞といふべし

斯く明日おてるか起出でざるを怪み部屋に至れバ床は裳脱けのから蟬にて影もなけれバ人々驚き夫々人を走らして搜索等閑あらされど行方更に知れざりけり

第六回

「梧桐一葉秋忽ち深く早や朝夕は肌寒く單衣の上に羽織着る給も丁度時節柄とて椽に敷物まりしめつ學友兩三輩と最中の月を肴として汲交のる洋酒の酒宴自身か前に德利壹本銘も手酌れ機嫌克道行「上村君此前の親睦會に妙な夢を見た上村「ドンナ道行「君橋本金三郎を知て居るか上村「知て居るところか親友になれもとんだことにて此地にハ居ない道行「とんだことゝハ藝者一件ちやないか上村「ソレヽ、君よく知て居る増田君彼事件に關係のあるたらう増「僕實に座へくつてまどゝ目に逢た道行「僕も人に呻されぬ奇談のあるが脫走したか増「尤も道行の仕方ハ開化の仕方だが友人の物を集めて脫走したらまが惡いシカシ其罪を惡んで其人を惡まぜサーアレモなか〳〵ヤリテダカラ其內歸るたらう上村「サーヨあるとこへ手紙も來たさうたしなんだからうまくやるやうな呻しざそれハさうと君の內の別品ハ此頃居なれといふことだがこれも脫走か道行「少し目的があるから兩三年暇を貰ひたいと行てしまつた増「情人でもあつたのだらう道行「ナニさうでもないか上村「君ハ正直たからんでも眞に受るがあの郞に居る時なんでも虫があるやうだと升屋のおつるかハつたつけそいつと出奔したに違ひなるまい十四のそこらで壹人でどこへいかれる者か増「ソーヨ君が買うぶり思案をかへたまへ時に上村今夜ハキヤツガ待ているせ時間が宜しい清瀨同行したまへ「僕ハ藝者なら交際が娼妓ハ淨めんだ増田君ハ橋本の轍を蹈たまふな矢敬な君が娘を人にさらはれたよりや僕なのゝ借た道行「マダなんだか別りもまないに増「迷ふとそんなもの君も怜悧だとおもつたら愚になつたせー道行「なんとでもいゝ給へ僕ハあの娘に手でもつけやしまいし上村「それだからおかしいといふのに道行「どうせ君方ハ情の先生僕ハ生徒たから負ておかう増「さら閉口されて張合がわるい生徒なら數へてやるサー行たまへ「今夜ハ淨兒月謝だけざして授業と署中休暇にしてもらおふ上村「モー署中ハ過た寒休みとりおきか僕ハ內へ爲換をとりにやつたまだこぬから財政困難ナニ月給で足るものか道行「君不經濟なことはかりするから獨りで下宿するに二十五圓で足りないことがなるものか上村「ナニ影法師ともに二人サーフワイ圓貸したまへ道行「君のことゞから貸すがはんまり無益なことハよしたまへ親友ハよしみに忠告をするのだ僕とちがつて君ハ活潑たから增來ハ餘程出世をもたらうと知己中の知己と思つて居るのざ田君も月給から十日目に內へ請求とハあんまりた少し氣をつけ玉へ君が給たハあすなる人物酒も呑べし登樓もすべー自由ハ天賦の賜だから惡んとはいハあんまり自由過ると野蠻に流れるからいゝかげんにしたまへ僕ぜニーに惡まれて居るが君方の愉快を妨げてハ惡いから持て往たまへ上村「大分御談議かながいぞべりりトルに「レシーブ」するから返せ道行「協同キ義だからいつでもいゝけれど増「實ハ登樓するハおやないによすきし目途がなつて二三十圓入のだが僕も今都合が惡いから友人か借集めたのサー行左樣なら失敬庭から行せ道行「とこでも勝手に行たまへ柴籬潜り兩人ハ月に嘯き歩を行道行「アヽ好月だ照ても小供心にゑれかいふまと氣にして出奔したの今増田や上村の呻しハ多分誤聞したのだらう其時殘した書置にどうもそんなことは思はれない併し小供と思つても女の文句あんまり出來すぎてるおれの迷かしらしてと坐敷に入り手箱の內より書置取出し繰り返す其文に曰く

（未完）

我家

末津あへ

春

我家は山又山の奥
軒れ下には流きわり
清き唱歌は鳥の聲
舞へるが如き種蒔の

庭は自然をそれまゝに
後ろの方に林あり
調べれ節は水の音
見えて櫻は匂ふなり

夏

問はゞ答へんこやこ人
清き流れをめぐらして
山はたらたの汗わらひ
郭聲高くひゞかして

水無月とても我家は
涼しき風を宿らして
晝寢そる身の人を待つ
眠むる無邪氣の作男

秋

淋しきものと暮秋を
秋のとり入れ忙がし、
月の光りを灯に代へて
籾とる夜更朝は疾く

云ひしはたれぞ我里は
山にも野にも品多し
蟲れ鳴く音を調子にて
稻つけ馬の聲たかし

冬

見ゆる限りを庭に占め
樵夫の道も炭がまも
枯木に花の柴負ふて
往きかふ人も見ゆるなり

遠く連なる峯をかき
丸木の橋も庭にわり
花形のこそ犬つきて
榾火にむつむ窓の外

寄書

つれ／＼

犬口

（一）此より西鶴文は再潜まん

下和の玉も唯一箇にして一人の有なれはこそ鄭重がるなれ數人數十人數百人と各々其一箇を握りなば、何時しか下和の名も消え、玉も光霞まん。 西鶴、好色本に名と出して其世に憎まれてより、遂に其名も聞こえでありしが、一度、西跡氏に邂逅ひしが彼が爲には僥倖なりしか。 盛や、今に於て西鶴と言へは誰知らぬ人もなき勢。 さりなから衆多くは其名は知れど其作を見で囃すのミ。 偶々其作を求れど手易くは得求めぞ、空な噂を重ね益々西鶴の名を昂くなしぬ。 さりとは無情や、 此頃武藏屋及ひ吉岡書店より、西鶴物を出し天下に撒きぬ。 此西鶴を珍重がらずあるへき初ぞと案ぞ。況してや、向后續々飜刻せんとのことあれは言はぞも更なり。 さては其文も學はずなりて終らん。 はゝ此も新文學の入り込む前兆あきは泣くには及はねと、 眼前に西鶴文を眞似びて飯を喰ひし輩は悲まんと思ふ。 さても聞たや、入り込む新文學とは何なるや。我も心當りはあれと今は言はで置かん。 （二月廿八日）

（二）飛ひ入りの言文一致家を哂ふ

田舎の人間が初めて京見物して歸るや、末た京知らぬうかゝやからに對ひ、身振りまで仔細らしく。 言葉付き俄に京振りて、言ひたくもなき話して其言葉の訛りゐるが聞かせたく、嚙み切れぬ言葉遣ひにかめお杯吹かして濁らし。 譽められもせぬ下等の言葉さへ打ち交せ、万事京と言ふ名に鼻隆くして得々物するぞ、京知をる人よ見せなば嘸や可笑がるべし。言文一致に最も下等の言葉を忌むへきとは、 己が如き言文一致を可厭がる者さへ知り居れバ、 苟も言文一致に筆染えし人の知らさる筈のなきものなり。 さるに初めて末松氏が言文一致のことと言はれ。次に山田氏が仝しく唱へらきてより早年に亘るも、末た今日ぶ於て言文一致派よ顔有る人さへ、唯口から出任せの言葉を其儘筋も訂さで書き雜へ。此ぞ言文一致と見せ付けらるゝ我等ひつらさ。 此と見倣ひてか飛び入りの言文一致家、殊に田舎の言文一致家ぞ哂ひて遣りても倘ぞ餘わるものわり。 京言葉と土台とじける言文一致なれバ、田舎言葉の骨々しけるを聞き馴れし耳には珍らしく、正撫くも其下等なる言葉さへ善きとぞ習ひ覺え、覺え込みて用ゐるぞ阿呆ゐるとならずや。 わが言ふ所と疑はゞ、彼等が得意と認めける一文を手に取りて見や！ 此ては迚も言文一致の目的は遂けられ得まじと思ふ。 心せよ／＼。

（三）新字製作の事

撫澤氏の（濁音でもない半濁音でもなくてまた清濁半濁等を合せ連ねてもなてこまゝなん音がなつて、これは是非新字と以て補はなけれはならず）とは如何ある音のなりて、此を言如何ある新字よて補ふのかい知らねど、己が言文一致家に言ひたき所の新字製作の事とは違ぬと思ふ。 元よりわが言ふ所、山田氏の（語句を簡略にして濟ませる事）の一ッにも足らざるべけれど、 兎角長くありたがる言文一致よ對しては一寸好き都合ともならんか。 即ち言文一致よ於て常ぶ最も多く用ゐる語。（です）（でした）（でせう）又は（ます）（ました）（ません）（ませう）の類と力めて畫の少き新字一箇宛に片付けあれバ、仮令仮字ありながらも二字三字四字と數多く筆使はんよりは手數省きて幾程か便利と思ぬ。 恰も他の体よ於て（なり）（たり）を（也）（見）（此は威服も出來ねど、）く書くごの如し。倘ほ此理窟を以て攻め行けバ？ 攻め往けバ！よ、一工風してこても損にはあるまじきぞ。（三月四日）

言文一致家

（四）女子の名は必ず仮字にて書くへき事

此頃此傾向甚敷くありけれバ言ぬ。 よしと言ふを敵と書

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

き、ひでと言ふを秀と書けれ、物識りらし　、えらきやうに聞こゆれど、其よてハ男子の名を間違ふとあり。又敬と書きてハよしと讀むへきか、けいと讀むへきかと惑ふとなり。仮令又よしと興志と書きけれバとて、尚ホ男子の名を誤る事無しと言へず。此等ハ矢張りよし、ひでと書くへきもれなり但し深雪(みゆき)と言ひ、松枝(まつえ)と言ふ類も是非よ仮字にてとハ書ハず。此等ハ強ひてせぞとも自ら男子の名とハ異なる所なるものなれバ、其人の意よ任してよかるへし。さきバ元よりなれど、男子の名ハ必ず漢字と定めて置くぞよし。（三月八日）

伊賀國結婚の奇風

笹川はる

此の伊賀の國では婚姻について甚だ珍らしい風習が有り升。其れは他でもなく何處の國でも大抵荷物は婚禮日よりも二三日前よ向ふの家へ送るのでもが、之れは、さうでなく良家二三年普通の家で五六年後から送るれです。まだ〳〵甚しいののよ至ッては十年か、十五年後から時よと自分の生んだ娘が嫁入りする頃に來るのが有り升尤も之れと稀れですが。で、當坐は、るいがい皆實家へバかり歸ッて着く婚家先へには居ません。其れ故隨ッて夫婦間の愛情も—なに、とやかう言ッたら直に歸る許りのこと—どうしても水臭いでそ。然し實家の者よは、甚だ世話がなくて、嫁にやるのに、都合が好いでしやう。ここは妾の家の奴婢達が申した一話しのし、聞き馴れぬ身には妙に覺えられる者、御參考までよ當地の奇風お知らせ申します。

戀のうたにつきて

美濃笠松　撫箏女史

名にしおふ松平信綱朝臣の室龍泉院と申もし「後の世に戀の歌とよみつたふるは其心の程の拙き事も見ゆるまゝよまぬ方まさきり」云々とてれたく婦人の歌よむものを戒めたまひけりとかや聞えはへりけるを此頃しきしまの道にそらなく名わる佐々木大人のものせられたまひける文の中な「戀をたてを事とのみ思ふ人は信實の限なることを知らぬ誤なり」とて暗に戀のうたの無下なれやしからぬことを示したまひぬまこと戀の歌は女子の詠むへからさるものよや詠みて苦しからぬものにやなはを教へてよ聞かせてよ

通信答問

●春の空——㈠和歌初學書には「ふるの山ぶみ」、呉竹集などがいゝでそ㈡韻文初學書はまだ有りません。當誌上よやがて出そつもりです。

●こち——朝々摺水で身体を拭ふハ衛生上宜しい事ですが、扨皮膚ハ是非黒くなります。顔などハ摺水で拭いて別段よいゝ事も有りません。

●8K——身長を伸すと言ッて別に法も有りません、身体粧飾で高く見せる位なものです。身長の低い人ハ決して横縞物又ハ辨慶縞を着る物でなりません。是ぞといよ〳〵低く見えます。一番いゝのと竪縞の物です、之に亞ぐれハ無地又ハ微塵物です。女子ならバ髷を些し根上りの氣味にし、そして両鬢をやゝ縮ませるのも身長を高く見せる一法でそ。バナンは幅廣で無いのを用ゐるに限り、ろして帶ハそこし胸の方へ上げる氣味な〆めるのが宜しいです。

●けい子——㈠折角の御尋ですが切疵の跡れ毛と藥でしかと受合へる物ハなりません㈡いらつめ第廿四号殘本ハ少々バかり有ります

●藤元なさ——㈠バノラマと言ふ語は英語で影彩畫といふ義でそ。普佛戰爭でも南北戰爭でも何でもバノラマと言へるのです㈡通常女子日々の賃仕事で手奇麗で利益の有るのは繪畫抔でしやう㈢鈴木弘恭氏の譯された百人首ハ初學よもよかります。

●横田駒太郎——㈠制度とハ服飾、祭祀、租税などの意味で御問になッたのですか？　そきあら伊藤仁齋の制度通といふ書（價七八十錢）が初學には宜しいでそ。其上にハ令義解もなります、延喜式もわります。圖解を施した物と有りません勿論後世に至り、數種出來ても居ますが、さしていゝ物でも有りません㈡京山作の歴世女粧考（七十五錢位）は日本古代からの婦人の風俗を縮入にして書いたものです。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

●みね子――㈠應募文の缺点は今後とも益々示して行き、それも又撰擇方もいよ〳〵嚴にするつもりです㈡言文一致の文章は今日まだ創成の際とも云ふ時にある都内の地方人に處々見かられぬ處が有るかもしれませんが、併し是は元より言文一致派も覺悟して居る事です。是等は語典、語彙杯の完成と共に年を逐ッて効を奏させて行かなければありません㈢韻文論大要を當紙に掲載する事もこや大抵準備も出來ました故近い内から其運びにしましやう㈣神田小川町一番地依田百川、牛込區大久保餘丁町坪内雄藏、淺草區千束村中西梅花、神田平永町山田美妙、牛込北町尾崎紅葉、駒込千駄木町森鷗外、下谷谷中村幸田露伴、根岸金杉村森田思軒、饗庭篁村、築地一丁目須藤南翠、以上重立ッた文學者の住居です。

●淺香――龍腦或は樟腦は唯普通に沸騰させる位では六かしいれですが、ァケとり藥に用ゐるためならば充分に鎔解し切らずとも宜しいのでそ。

●TM――㈠小說刪正をする規則はいらつめ第廿七号にあります㈡應募文〆切日は郵便局の消印を証としまそ。

●たつ子――㈠時計をトケイと讀むのは洵に變な讀方です。一寸見ると「時」と略して「ト」、計と「ケイ」と音讀したやうに見えますが、是はさうで無いのです。其昔は斗鷄と書いたのです。外國から渡ッた時辰儀で鷄の形にこしらへてあッたのを見て斗鷄と名づけ、それから其音ざ今日に殘り、今は時計と當字をする事に爲つたのです㈡モナカといふ菓子は最中の月即ち仲秋の月と言ふ意で、菓子の圓形を形容したものでした。今は雪輪でも花形でもモナカと言ひますが、これは轉訛です。

●阿増よし――雨月物語は六七十錢、浮世風呂、娘節用は活版の飜刻が有り十四五錢で、いづれも普通の小說書肆にあります。但雨月物語は古本專一の書肆でなければ有りません。

●樂水――㈠面皰の痕の紫色治法はいらつめの番号に出て居ました。郵劵三錢五厘御送附あらば差上ます㈡佐々木氏發賣石鹼の効否は試みても見ません故知れません。

●すみぞめ――㈠胡麻油は不消化です。牛脂や豕脂の方がむるかに消化は優ッて居ます㈡鷄の肉は牛肉より早く消化しますが、肉類のうちで最も早く消化するのは魚肉です。

●きぬ子――㈠口中又は唇のアレはリスリンを塗るが宜しいです㈡タコやマメを治すには烟草の吹殻を飯粒で煉りそれを付けるが宜しいです㈢顏などを過まッて物で打ッた時には大根をおろして手早く付けるとアザにも爲らぬ、又腫れ上りもしません。

俳諧矯風雜誌

本誌には●錄事●會說●講義●論說●俳況●解釋●質疑●詞林●寄書●等の諸欄ありて專ら俳諧に於ける從來の弊風を矯正せんとを目的と爲すものなれは該道に在る諸君は勿論苟も文事を以て世に立の士等と一讀せさるへかさるの雜誌なり
○一冊定價金七錢拾冊前金六十六錢郵券代用ハ五厘劵ょて一割增郵便小爲替ハ東京郵便局へ振込宛名は當會のと
○本會規約書を望まる諸君ハ郵便二錢を投せらるへし會員にハ本誌無料にて贈る

東京市日本橋區蠣殼町二丁目四番地
蕉風明倫敎會本院搆内

俳諧矯風會

帝國農家ノ團体ナリ速ニ來テ加盟セラレヨ

二月廿八日農談第廿三号ヲ刊行セリ

帝國農家一致結合

機關雜誌 **農談** 大サ美濃紙大紙數三十五頁見本六錢規則ハ郵劵貳錢要

●同盟員ヘハ **徽章** ヲ贈與ス●

遠江犬居

會費一ケ年金五十錢入會ノ節加盟金ヲ要ス

●一致結合事務所●

第一義其十二號目次

●三月十日發刊●郵税共金四錢とす

溪聲
忍耐……
廣長舌
若在大臣敎以正法若在王子敎以忠孝……
山色
原人論……（承前）……
清淨身
能仁柏巖神師略傳……
夜來八万
第一義の成長に付て我國の元氣を促そ……在丹波　岸本治三郎
寸歩と移さぬ彌勒世界……在佐賀　鼻田道榮
印度亡滅は英の一商人腦力と以てす……在朝鮮　本庄政重
四千偈
文一章……●詩十五首……●歌五首……
他日如何
偶感……伊賀　伊藤俊道
英國憲法新論有感……（承前）……赤波　憂宗居士

發行所　東京市芝區白金臺町二丁目九番地　宗粹社

教育

第四十四号

明治廿四年二月廿五日發行

●教育 女學雜誌ヲ讀ム●學說 地理學理論一斑●算術略論●鑛物學●敎授案内●文藝 ●詩●和歌●漢文●雜錄 佛國巴里ノ公立學校ニ係ル

技藝ノ敎授必要ヲ論ス初等敎育ノ近況●神仙說●學校回リ●雜報 正一位三條公薨●東野元田先生●春山小山先生●馬鹿敎師●間男敎員●泥棒吏員●大日本敎育會の總集會●女丈夫の實業女學校●珠算傳習生●學れ友の成長●電燈●○○○○罰金ょ處せらる●農學講義錄●廣告（一冊金七錢○半年分六冊金三十八錢○一年分十二冊前金七十錢○毎冊郵税金五厘○現金前金にあらされハ發送せす）

發行所　東京日本橋區村松町七番地　學海指針社

法之雨第三十八号目次

◎論說
○議會に出たる宗教問題に就て……夢笑道入
○死刑廢止の意見……大內青巒
○禁酒……山田湖南
○佛教再興の意見……文學士 井上圓了
◎演說
○名古屋師團軍隊演說……(眞宗大谷派擬講)……吉谷覺壽
◎講義
●五重唯識要旨……寺島一之
○心理學略說……國友修
○八識大旨……(第四回)……足立禮幹
◎寄書
○本源を治めさるへからす……吉村眞澄
◎文苑
●(文)書觀世音菩薩三十三身圖後(脇田堯惇)●(詩)軍人說敎(小栗栖蓮)●北海雜詩(南條碩果)●辛卯一月偶作(泉刺山雲)●仝上(溪嶂)●新春(吉村眞澄)●斷橋啼鵑外二首(服部恆山)●古戰場(服部華山)●除夕所感外一首(日野珠堂)●雪中早梅(田部井竹香)●(歌)●寄國祝(服部恆山)辛卯元旦(田部井竹香)●雪中梅外一首(吉村眞澄)
◎雜錄
○父母の恩德十種(父母重恩經)○中將姬の格言五種(和論語)○秀吉公の明智(柳庵雜筆)○家康公五字七字の訓誡(翁物語)○梧窓漫筆拔書(酒落堂主人)
◎諷諭小譚
○鮒滿水を賀す……(井蛙文談摘錄)
◎雜報
●勅作の佛像帝城に迎へらる●兵役免除の理由●特志家の美擧●神道各敎派●宗諄女王殿下●宗敎病院●各宗の檀家●耶蘇敎信徒の增加●ユニテンアリの代表者●耶蘇敎徒の不敬●西人義士の墓前に泣く●御助學校の非難●軍人說敎●諸高德の遷化●高山支部●三條公薨去●書籍の披露
◎[illegible]會報告……◎特別掲載
◎廣告十數件……

發行所
愛知縣名古屋市下茶屋町十三番戶
法雨協會
(遞信省認可)

花織錦賣捌廣告

横濱製產新發明花織錦の儀は實業家川崎花子氏多年の困苦と經驗とを以て舊來の紙布よ一層改艮を加へ實よ完全完美の好結果を得たる未曾有の新織にして曾て各新聞紙上に非常なる賞贊を得て面目を博し花子氏躬自ら工女を指揮し舊に倍し工塲恰も梅林よ鶯先導して諸鳥囀るり如く其盛なる事尋常織殿の比に非す今回特約を結ひ支店を設置泥く都府よ於て販賣せんとす希紳士令孃樞要の逸品なれハ價直の低廉と物品れ佳艮とを御一覽の上陸續御購求有ん事を願上候

品目

一單物地　一女帶地
一夜具地　一座蒲團地
一窓掛地　一テーブル掛地

其他御注文に應し調製仕候

日本橋區蠣殼町二丁目七番地
氏家なか